

イエス様の譬え話

金 俊起・吉川 充

1. イエス様と譬え話	マタイ13：10 - 13	1 - 2
2. 種蒔き(人)	マタイ13： 2 - 9, 18 - 23	3 - 4
3. 毒麦	マタイ13：24 - 30, 36 - 43	5 - 6
4. からし種とパン種	からし種 マタイ13：31 - 32、パン種 33	7 - 8
5. 隠された宝と良い真珠	隠された宝 マタイ13：44、良い真珠 45 - 46	9 - 10
6. 地引き網と一家の主人	地引き網 マタイ13：47 - 50、一家の主人 51 - 52	11 - 12
7. 成長する種	あかり マルコ4：21 - 23、量り 24 - 25、成長する種 26 - 29	13 - 14
8. 良いサマリア人	ルカ10：25 - 37	15 - 16
9. 真夜中の友人	ルカ11： 1 - 10	17 - 18
10. 愚かな金持ち	ルカ12：13 - 21	19 - 20
11. 実のならないいちじく	ルカ13： 6 - 9	21 - 22
12. 上席と末席、食事の招待	上席と末席 ルカ14： 7 - 11、食事の招待 12 - 14	23 - 24
13. 盛大な宴会	ルカ14：15 - 24	25 - 26
14. 弟子となる道	塔を築く人 ルカ14：28 - 30、敵と戦う王 31 - 32、塩 34 - 35	27 - 28
15. 失われた羊と銀貨	失われた羊 ルカ15： 3 - 7、失われた銀貨 8 - 10	29 - 30
16. 失われた息子	ルカ15：11 - 32	31 - 32
17. 不正な管理人	ルカ16： 1 - 13	33 - 34
18. 金持ちとラザロ	ルカ16：14 - 31	35 - 36
19. 役に立たない僕 <small>しもべ</small>	ルカ17： 1 - 10	37 - 38
20. 仲間を赦さない僕 <small>しもべ</small>	マタイ18：21 - 35	39 - 40
21. 祈りについて	不正な裁判官 ルカ18： 1 - 8、自称義人と取税人 9 - 14	41 - 42
22. ぶどう園の労務者	マタイ20： 1 - 16	43 - 44
23. 二人の息子	マタイ21：28 - 32	45 - 46
24. 悪い農夫たち	マタイ21：33 - 46	47 - 48
25. 結婚の披露宴	マタイ22： 1 - 14	49 - 50
26. その時について	いちじくの木 マタイ24：32 - 35、目を覚ましている僕 <small>しもべ</small> 36 - 44	51 - 52
27. 忠実な僕 <small>しもべ</small> と悪い僕 <small>しもべ</small>	マタイ24：45 - 51	53 - 54
28. 十人の娘	マタイ25： 1 - 13	55 - 56
29. タラント	マタイ25：14 - 30	57 - 58
30. 羊と山羊	マタイ25：31 - 46	59 - 60
31. 地の塩、世の光	地の塩 マタイ 5：13、世の光 14 - 16	61 - 62
32. 地上の宝について	天の宝と地上の宝 マタイ 6：19 - 21、目 22 - 23、二人の主人 24	63 - 64
33. 空の鳥と野のゆり	マタイ 6：25 - 34	65 - 66
34. ちりと梁、二つの門	ちりと梁 マタイ 7： 1 - 6、二つの門 13 - 14	67 - 68
35. 二つの実、二つの土台	二つの実 マタイ 7：15 - 20、二つの土台 24 - 27	69 - 70
36. 古い物と新しい物	マタイ 9：14 - 17	71 - 72

イエス様の譬え話(1)

イエス様と^{たと}譬え話

10 すると、弟子たちが近寄って来て、イエスに言った。「なぜ、彼らにたとえでお話しになったのですか。」 11 イエスは答えて言われた。「あなたがたには天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。12 というのは、持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうからです。13 わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです。 マタイ13：10 - 13 (マルコ 4：10 - 12、ルカ 8：9 - 10参照)

譬え話：

譬え話は、ギリシア語でパラボレーと言います。パラは「傍らに」ポレーは「置く」ことですから、パラボレーは、「(本当に言いたいことの)傍らに(別の話を)置く」、逆に言うと「話の傍らに別の意味がある」ということになります。

「種蒔き(人)の譬え」を境にイエス様は、御国の奥義を、譬え話の形で話されるようになりました。その奥義とは、神の支配がイエス様の活動ですすでに始まっているということ、また御国の王が「アバ、父」であるということです。譬え話で語ることで、「ほかの人たち」には、彼らが悔い改めてその罪を^{ゆる}赦されるまで、奥義を^{なぞ}謎のままとされたのです。

1. イエス様と譬え話

(1) 短い譬え

初めのうちイエス様は、山上の説教(マタイ 5 - 7章)のように、はっきりと話しておられました。譬えを話す場合も、「地の塩」「世の光」のように身近な事柄を通して真理を考えさせる、短い表現が使われました。その譬えによってお話全体の意味が一層鮮明になる、そういう譬えでした。

(2) 反対強まる

やがてイエス様の宣教に対する反対が強まってきます。パリサイ人はヘロデ党と組んで、イエス様を葬り去ろうと相談し始めました(マルコ 3：6)。会堂から追われ(ヨハネ 9：22)、身内の者からは気遣い扱いされ(マルコ 3：21)、離れ去る弟子も出てきます(ヨハネ 6：66)。敵対者たちは群衆に紛れて、揚げ足を取ろうと待ち構えています。

(3) 譬え話

そのような中でイエス様が、謎を含んだ譬え話を話し出されたのです。「なぜ、彼らにたとえでお話しになったのですか。」という弟子たちの質問に、イエス様は、「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。」と答えた後、イザヤ 6：9 - 10を引いて、「彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしない」と言われました。

つまり譬え話は、悔い改めて赦され御国に招かれることを願っているか拒んでいるか、と問い掛けているのです。そしてその問い掛けに正しく^{こた}応える者だけに、御国の奥義を知ることが許されるのです。

(4) 弟子たち

弟子たちは、すべてのことを解き明かされます。天の御国を真剣に求める者に、奥義はさらに豊かに与えられるのです。イエス様は、「あなたがたの目は見えているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです(マタイ13：16)。」と、弟子たちを祝福されました。

(5) ほかの人たち

イエス様は、「ほかの人たち(マルコ 4：11)」には譬え話で語られたままです。真理を譬え話の中に分散させて、彼らには分からなくされたのです。

彼らに分からなくされた真の原因は、彼らが現在の自分に執着して、悔い改めて赦されることを拒んでいることです。イエス様が拒んでおられるのではなく、彼ら自身が拒んでいるので、拒んでいる間、奥義を知ることが出来ないのです。

2. イエス様の譬え話と私たち

私たちは、イエス様の十字架と復活による救いを信じて御国に招かれました。この事実こそが、譬え話を聞いて悟るための鍵となります。

(1) 御心を求めて

譬え話は、説教の中の例話として話されたものではなく、それ自体、説教として話されたもので、その内容は、イエス様がこの世に来られた目的と深くかかわっています。ですから、人々を罪から救い、救われた人々が天の御国で生きることを教えようとされる、イエス様の使命とのかかわり中で理解する必要があります。そのようなことに特に留意して、御心を求めながら読んでいきます。

(2) 応えて行動を

イエス様は譬え話を「あなたがたはどう思いますか。」という言葉で始めたり、「耳のある者は聞きなさい。」という言葉で結んだりされました。こう言うておられない時も、言外にこういう意味を込めておられることが多いのです。イエス様は悟ることを許された弟子たちに、従って私たちクリスチャンにも、「譬え話を聞いて悟り、決断し、応えて行動しなさい。」と、迫っておられるのです。

イエス様の譬え話一覧表 (僕 = 僕^{しもべ})

譬え話	マタイ	マルコ	ルカ
地の塩	5:13	9:50	14:34-35
世の光、あかり	5:14-16	4:21	8:16, 11:33
地上の宝について	6:19-24	ルカ16:13	12:33-34, 11:34-35
空の鳥と野のゆり	6:25-34		12:22-34
ちりと梁	7:1-6		6:41-42
石と蛇	7:7-11		11:9-13
二つの門	7:13-14		13:23-24
二つの実	7:15-20		6:43-44
二つの土台	7:24-27		6:47-49
病人のための医者	9:12	2:17	5:31
古い物と新しい物	9:14-17	2:18-22	5:33-38
身勝手な子供たち	11:16-19		7:31-35

二人の債務者			7:41-50
種蒔き(人)	13:2-9, 18-23	4:2-9, 13-20	8:4-8, 9-15
毒麦	13:24-30, 36-43		
量り	7:2, 13:12	4:24-25	6:38, 8:18
成長する種		4:26-29	
良いサマリヤ人			10:25-37
真夜中の友人			11:1-10
愚かな金持ち			12:13-21
実のならないいちじく			13:6-9
からし種とパン種	13:31-33	4:30-32	13:18-21
宝と真珠	13:44-46		
地引き網	13:47-50		
一家の主人	13:51-52		
上席と末席			14:7-11
食事の招待			14:12-14
盛大な宴会			14:15-24
弟子となる道			14:25-35
失われた羊	18:10-14		15:3-7
失われた銀貨			15:8-10
失われた息子			15:11-32
不正な管理人			16:1-13
金持ちとラザロ			16:14-31
役に立たない僕			17:1-10
仲間を赦さない僕	18:21-35		
不正な裁判官			18:1-8
自称義人と取税人			18:9-14
ぶどう園の労務者	20:1-16		
二人の息子	21:28-32		
悪い農夫たち	21:33-46	12:1-12	20:9-19
結婚の披露宴	22:1-14		
いちじくの木	24:32-35	13:28-31	21:29-33
目を覚ましている僕	24:36-44	13:32-37	12:35-40, 17:26-35
忠実な僕と悪い僕	24:45-51		12:41-48
十人の娘	25:1-13		
タラント、ミナ	25:14-30		19:11-27
羊と山羊	25:31-46		

種蒔き(人)

2 すると、大ぜいの群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に移って腰をおろされた。それで群衆はみな浜に立っていた。3 イエスは多くのことを、彼らにたとえで話して聞かされた。

「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いているとき、道ばたに落ちた種があった。すると鳥が来て食べてしまった。5 また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。6 しかし、日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。

7 また、別の種はいばらの中に落ちたが、いばらが伸びて、ふさいでしまった。8 別の種は良い地に落ちて、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結んだ。

9 耳のある者は聞きなさい。」マタイ13:2-9

18 ですから、種蒔き(人)のたとえを聞きなさい。

19 御国のことばを聞いても悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪って行きます。道ばたに蒔かれるとは、このような人のことです。20 また岩地に蒔かれるとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。21 しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。22 また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。23 ところが、良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いてそれを悟る人のことで、その人はほんとうに実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結びます。」

同18 - 23

(マルコ 4: 2 - 20、ルカ 8: 4 - 15参照)

当時の種蒔き:

イエス様は数多くの譬え話をお話しになりましたが、その中で「種蒔き(人)」と「毒麦」の譬え話については、弟子たちの質問に答える形で、詳しく解き明かされました。そこでイエス様の譬え話を学ぶのに先立って、この二つの譬え話を、二回に分けて学ぶことにします。

ところでこの譬え話の中での種の蒔き方ですが、当時のパレスチナでは、今の私たちのように耕してから種を蒔くのではなく、種を蒔いてから耕しました。種を手でばらまくように蒔くか、種を入れた袋に穴をあけ、それをろばに負わせて、歩かせながらばらまくかしました。こうして種をばらまき、その後でそれを土に^す蒔き込んでいたのです。

こういう蒔き方ですから、種は、道ばたや岩地やいばらの中、はたまた良い地に、^{ところ}嫌わず落ちました。その落ちた先の違いが、この話の主題です。

1. 天の御国についての説教

マタイの福音書は、山上の説教(5-7章)、十二使徒への訓話(10章)、天の御国(13章)、兄弟関係(18章)、終末の預言(24-25章)と、イエス様がなされた五つの大きな説教を記しています。

その第三説教が「種蒔き(人)」「毒麦」「からし種」「パン種」「隠された宝」「良い真珠」「地引き網」という、天の御国についての七つの譬えと、「一家の主人」という、天の御国の弟子についての一つの譬え、からなる説教です。

第三説教の前半は、イエス様が舟に腰をおろして岸の群衆に、後半は家に入って弟子たちに、それぞれ話されたものです。イエス様はよく譬えを使ってお話しになりましたが、中でも第三説教は、譬えによる教えに終始しておられる点で際立っています。

なおマルコとルカは「神の国」と記しましたが、マタイは、ほとんど「天の御国」か「御国」です。福音書記者の中で最もユダヤ人的だったマタイは、「神」と呼ぶことを避けたのかも知れません。

2. 種蒔き(人)の譬え (2 - 9 , 18 - 23)

イエス様がこの譬え話を話されると、弟子たちは「なぜ、彼らにたとえでお話しになったのですか」と尋ねました。イエス様は、譬えで話される理由を明らかにされてから、この話を解き明かして下さいました。それによると、

(1) 「種」と「土」

「種」は福音を伝える御言葉で、「土」は、その御言葉を聞いた人の、心の状態を表わします。同じ御言葉を聞いたのに、聞いた人の心の状態によって結果が大きく異なることを、イエス様は教えておられます。

(2) 「道ばた」 (4 , 19)

道ばたは、人や車に踏み固められていて、落ちた種を受け付けることが出来ません。

「道ばた」とはこのように、人間の思いやこの世の論理で武装していて、御言葉を聞いても最初から受け付けようとしなない、閉ざされた心のことです。御言葉を受けても心まで届かず、御言葉はサタンに奪い去られてしまいます。

(3) 「岩地」 (5 - 6 , 20 - 21)

岩地の上を土が薄く覆っています。土は雨や露で湿るし、日が照れば暖まるので、ここに落ちた種は容易に発芽します。しかし土が浅くて根を張れず、日が照って土が乾くと、枯れてしまいます。

「岩地」とは、このように御言葉を聞いて安易に受け入れますが、長続きせず、すぐ安易に捨ててしまう人を言います。一時燃えても、困難や迫害に遭うと、すぐ安易に身を引いてしまうのです。

(4) 「いばらの中」 (7 , 22)

深くて肥えた土地ですが、いばらの根が残っていました。ここに落ちた種は、発芽して根も張れますが、伸びたいばらに邪魔されて、育ちません。

「いばらの中」の人は、一度は御言葉を受け入れますが、神様がすべてではなく、他の声にも耳を傾けるので、この世の心配事や金儲けに心を奪われ、途中で挫折してしまうのです。

(5) 「良い地」 (8 , 23)

前の三つと違い、良い地に落ちた種は、深く根を張り、生長して、多くの実を結びます。

「良い地」は御言葉を聞いて悟る人のことです。ここで「聞く」は、聞いて従うこと、「悟る」は、恵みによって、御言葉を自分の生き方に組み込めることを言います。

(6) 「実を結んだ」 (8 , 23)

パレスチナでは、蒔いた種のおかげで十倍の収穫だそうですから、百倍、六十倍、三十倍の実というのは、それこそ大収穫です。神様に^よ頼めば、豊かな収穫に^{あずか}与れるのです。

種は福音を伝える御言葉で、どれも良い種^{はず}の筈です。それなのに結果がこのように違うのは、種が落ちる土地にすべてが依存しているということです。つまり私たちは、どんな心の態度で御言葉を聞いて受け入れるか、問い掛けられているのです。

ですから「種蒔き(人)の譬え」は「御言葉を聞く態度の譬え」でもあります。イエス様は正しい態度で御言葉を聞くように勤めておられるのです。その意味でこの譬え話は、すべての譬え話を聞いて悟るための出発点となるのです(マルコ 4:13)。

3. 「種蒔き(人)の譬え」と私たち

今の日本のクリスチャンにとっては、迫害というよりむしろ、日常生活の中での摩擦や「まだそんなこと信じているのか」といった嘲り、それに神様に^{あざけ}頼むだけでは心許なく、自力で何とかしようとする焦り、そういったものが「いばら」となって、御言葉を^{ふさ}塞ぐのではないのでしょうか。

そのような中でこの譬え話は、私たちに「道ばたや岩地に、種を受けないようにしなさい。いばらを早く刈り取りなさい。」と教え、良い地として恵みを受けよう、決断を促しています。

だから私たちは「聞く耳」の賜物を求めて祈り、「良い地」となって御言葉を受け入れ、日々の生活の中で行動に移せるように祈るのです。

毒麦

24 「天の御国は、こういう人にたとえることができます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。25ところが、人々の眠っている間に、彼の敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った。

26 麦が芽生え、やがて実ったとき、毒麦も現われた。27それで、その家の主人のしもべたちが来て言った。『ご主人。畑には良い麦を蒔かれたのではありませんか。どうして毒麦が出たのでしょうか。』28主人は言った。『敵のやったことです。』すると、しもべたちは言った。『では、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか。』29だが、主人は言った。『いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。30だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょ。』」マタイ13：24 - 30

37 「良い種を蒔く者は人の子です。畑はこの世界のこと、良い種とは御国の子どもたち、毒麦とは悪い者の子どものこと。39毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫とはこの世の終わりのこと。そして、刈り手とは御使いたちのこと。40ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにそのようになります。41人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行なう者たちをみな、御国から取り集めて、42火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。43そのとき、正しい者たちは、天の父の御国で太陽のように輝きます。耳のある者は聞きなさい。同13：37 - 43

毒麦(学名 *Lolium temulentum*) :

学名の *Lolium* は、ケルト語の *loloa* (ほそむぎ) からきています。 *temulentum* は「^{めいてい}酩酊する」とか「幻覚を起こす」という意味です。

イネ科の植物で、種子自体に毒はありませんが、種子の中に寄生する菌類が出す麻酔性アルカロイドの作用が、種子の毒と誤認されたようです。

毒麦の方が葉の幅が狭く、小麦と見分けることは出来ませんが、根が強く張っていて、毒麦を抜こうとすると、小麦まで一緒に抜けてしまうところから、地中海地方では、今でも、毒麦をそのまま生やしておき、収穫の時に穂の黒い毒麦を別に集めるのが、習わしとなっています。

毒 麦 と 小 麦

(注)「麦」と訳されているギリシア語シトスは、麦の中でも特に「小麦」を指します。

1. 譬えで語るのは預言の成就

イエス様は、弟子たちに「種蒔きの譬え」の解き明かしをされた後で、群衆に「毒麦」「からし種」「パン種」の三つの譬えをお話しになりました。

このようにイエス様が譬えでしか群衆にお話しにならなかったのは、預言(詩篇78：2)の成就で、「隠されていることども」を明らかにする 聞いて悟り、^{こた} 応える者には ためでした(13：35)。

その後イエス様は群衆と別れ、弟子たちを連れて家の中にお入りになり、そこで、「毒麦の譬え」を解き明かして下さいました。

2. 「毒麦の譬え」

「毒麦の譬え」は、他の福音書には書かれてないイエス様の譬え話です。

(1) 「天の御国は...にたとえることができます。」

これはアラム語の慣用的な表現で、「天の御国はこういう人のようなものです。」ということです。

(2) 「ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。」

「ある人」は「人の子」イエス様です。「自分の畑」は「この世界」のことで、「自分の畑」という言葉で、「この世界」が神様のものであること（創世記 1: 1参照）と、神様は、「この世界」を創造された後、ただ傍観しておられたのではなく、積極的に関わっておられることを示しています。

(3) 「...敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った。」

「人々の眠っている間に」は、怠慢や失敗のことではなく、平安と安息の時である夜中にも、「敵」が「毒麦」を蒔くことがあるということです。

「毒麦」は「悪い者の子どもたち」のことです。イエス様の「敵」である「悪魔」が、「つまずきを与え」たり「不法を行なう」「毒麦」を、人知れず蒔いて行くのです。

(4) 「やがて実ったとき、毒麦も現われた。」

「この世界」には、神の支配に属する「御国の子どもたち」とそれを拒む「悪い者の子どもたち」がいます。御国の到来が告げられているのに「毒麦」と「麦」が混在し続けているのです。放っておくと、「毒麦」は「麦」を躓かせるかも知れません。

(5) 「麦もいっしょに抜き取るかもしれない。」

「しもべたち」は自分で抜く積もりになっていますが、「主人」は、「いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。」と言って止めます。止めるのは、「麦」が道連れにされずに育つための、神様の配慮です。

(6) 「収穫の時期になったら」

「収穫の時期に」という表現は、「この世」には「終わり」があるということと、その時「毒麦」は滅ぼされるということを示しています。

(7) 「まず、毒麦を集め、焼くために束に」

「この世」で、「毒麦」やそれを蒔く「悪魔」の活動が制限的に許されてはいても、彼らは、終わりの日に焼かれるために存在しているのです。このことは、「麦」にとっては恵みの知らせです。

(8) 「麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい」

「倉」は、イエス様が私たちのために御国で備えて下さる場所です（ヨハネ14: 2）。

神様は「人の子」を通して、「この世界」に「良い種 = 御国のこどもたち」を蒔いて、守り育てになり、「収穫 = 世の終わり」には、「麦」を「倉」に入れようとしておられるのです。

3. 「毒麦の譬え」と私たち

初代教会に対する迫害が終わった時代に、迫害の中で背教し破門された人々を、許して教会に受け入れてよいか、永遠に受け入れてはならないか、意見が分かれました。その時アウグスティヌスは「教会は、完全で純粋で聖い人々だけが集まる完璧な所ではない。だから、彼らを切り捨てることで、教会を分裂させてはならない。」と語りました。

確かに教会は、イエス・キリストへの信仰を告白する信仰共同体（マタイ16: 17 - 18）として存在しますが、この世での教会は、完全な状態では決してなく、「毒麦」と「麦」が混在する状態で存続しています。

しかし、たとえ教会に「毒麦」と「麦」が混在していても、またその他の諸問題があったとしても、それは、眩く要因ではなく、「麦」を守り育てるための神様の配慮という恵みであることを、私たちは覚えるべきなのです。

罪人の選別・分離は、終わりの日にイエス様のなさることなのです。

からし種とパン種

31 イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、からし種のようなものです。それを取って、畑に蒔くと、³² どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの木になります。」

33 イエスは、また別のたとえを話された。「天の御国は、パン種のようなものです。女が、パン種を取って、三サトンの粉の中に入れて、全体がふくらんで来ます。」マタイ13:31-33

(マルコ4:30-32、ルカ13:18-21参照)

6 その小枝には空のあらゆる鳥が巣を作り、大枝の下では野のすべての獣が子を産み、その木陰には多くの国々がみな住んだ。

エゼキエル31:6

10 私の寝床で頭に浮かんだ幻、私の見た幻はこうだ。見ると、地の中央に木があった。それは非常に高かった。¹¹ その木は生長して強くなり、その高さは天に届いて、地の果てのどこからもそれが見えた。¹² 葉は美しく、実も豊かで、それにはすべてのものの食糧があった。その下では野の獣がいこい、その枝には空の鳥が住み、すべての肉なるものはそれによって養われた。

ダニエル4:10-12

からし種とパン種:

譬え話に登場するからし種は、くろがらし(学名 *Brassica nigra*)です。くろがらしは栽培され、種子は、すりつぶして、からしにしたり、絞って、食用油を採ったりしました。

種子は、厳密には「どんな種よりも小さい」ものではないのですが、当時 からし種のようなものは小さいことを表わすユダヤ的表現となっていて、最も小さい種とされていました。それが生長すると腕ほどの太さの莖が、4~5mまで伸びるのです。

なお古くから「空の鳥」は異邦人を表わす表現として使われていて、エゼキエル書やダニエル書も、「空の鳥が来て、その枝に巣を作る」という形で、主権が地の果てにまで行き渡り、諸国民が保護を求めて来ることを表わしています。

くろがらし

当時のパン種は、発酵した練り粉(パン生地)の一部を、次回のパン作り用に残して、使いました。パン種は、パンの材料としてだけではなく、律法や儀式、宗教的な教えの面からも、重要な役割を果たしていました(レビ2:11、7:13、10:12等)。

譬えに出てくる「サトン」は固体量の単位です。1サトンは13.17ℓですから、「三サトンの粉」は約40ℓということになり、パンにすると、百人分以上の、それこそ膨大な量になります。とにかく、その40ℓの小麦粉の中に、パン種を「入れ」て、練り込むのです。

練り込まれたパン種は、練り粉の大きな塊を発酵させて全体を膨らませます。この素晴らしい力が、ガリラヤで始まった天の御国の発展を知らせる譬えとして、ここで使われているのです。

1. 「天の御国は、 のようなものです。」

マタイ13章に記されている、天の御国についての説教は、解き明かし付きの二つの大きな譬え話と、解き明かしの付かない、六つの小さな譬えとから、成っています。

八つの譬え話のうち「種蒔き」「毒麦」「からし種」「パン種」の四つは、イエス様が、舟から浜の群衆に話されたものですが、この四つは群衆向けの譬えで残りの四つが弟子向けの譬え、と決め付けてしまわない方がよいようです。

パリサイ人との間に安息日論争やベルゼブル論争があったりして(同12章)、反対派との対決が表面化してきました。そのような中で弟子たちの教育に拍車をかけるために、イエス様はここで、天の御国の奥義(同13:11)についての、いわば集中講義をしておられるのです。ですから前半の四つの譬えも、群衆にお話しになりながら、弟子たちにお聞かせになっているのです。

なお六つの小さな譬えは、どれも「天の御国は、 のようなものです。」という定型的な表現で始まります。「天の御国(=神の国)」は神の支配ということですから、この語り出しは、「神の支配で起こることは、 で起こることと同じです。」ということになります。

2. からし種の譬え(31-32)

「神の支配で起こることは、 からし種で起こることと同じです。」という譬えです。

(1)最小のものが最大に

からし種は、諺としては最も小さいものでした。イエス様は、その小さな種が、「どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの木に」なるように、神の支配は、始めは人目に付かないほど小さいけれども、やがては想像も付かないほど大きくなる、と話されたのです。最小のものが最大となるこの際立った現象で、神の支配の拡大する様子が、生き生きと示されています。

(2)異邦人も受け入れられる

エゼキエル書やダニエル書の表現が、譬えの中に使われていますから、神の支配が世界中に及んで、異邦人が受け入れられるように定められていることも示されている、と言うことが出来ます。

(3)「からし種の譬え」と私たち

「からし種ほどの信仰(同17:20)」しか持たなかった私たちも、御霊に導かれ兄弟姉妹に支えられる生活の中で、想像も付かないほど変えられます。神の支配のこの恵みを覚え、神の栄光を表わすことが出来るよう、祈り続け、従い続けたいものです。

3. パン種の譬え(33)

「神の支配で起こることは、パン種で起こることと同じです。」という譬えです。

(1)隠されているものが表われる

「からし種」の生長は目に見えましたが、「パン種」の働きは隠されていて見えません。しかしその影響は力強く行き渡り、隠されている「パン種」が練り粉全体を、絶え間なく発酵させます。

イエス様の宣教で始まったばかりの神の支配も、やがて地上全体に行き渡るのです。

(2)「パン種の譬え」と私たち

私たちの^{まわ}りには、福音を信じ続けるのに妨げとなるような出来事が、しばしば起こります。しかし神の「パン種」が、すべてのことにおいて働き続けていることを知っているので、私たちは行き詰まることのないのです。

4. 二つの譬えが語られた理由

イエス様は、この二つの譬えを、「毒麦の譬え」とその解き明かしとの間に挿入されました。御国の到来が告げられているのに、毒麦と小麦が混在し続けています。イエス様は、たとえ妨害があっても、神様のご計画は変わらず、神の支配が必ず成就することを告げて、弟子たちを、そして私たちを、励ましておられるのではないのでしょうか。

隠された宝と良い真珠

- 44 天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。 マタイ13：44
- 45 また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。46 すばらしい値うちの真珠を一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。 同45 - 46
- 38 わたしよりも父や母を愛する者は、また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。 同10：38
- 21 イエスは、彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」
- 22 ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。 同19：21 - 22
- 8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとおと思っています。それは、私には、キリストを得、 ピリピ 3：8

弟子たちだけに語られた：

それまでは、群衆に話しながら、弟子たちに聞かせておられたイエス様は、群衆と別れて家に入り、弟子たちに「毒麦の譬え」の解き明かしと、「隠された宝」「良い真珠」「地引き網」「一家の主人」の四つの譬えを、お話しになりました。今度は弟子たちだけに語られたのです。

今回の二つの譬えの学びについては、この、弟子たちだけに語られたということと、二つとも発見者が「持ち物を全部売り払って」買ってしまうということが、重要な鍵となります。

1. 「隠された宝の譬え」

「神の支配で起こることは、畑に隠された宝で起こることと同じです。」という譬えです。

(1) 思いがけず

畑に財産を隠すということは、戦争や盗賊の危険が多い当時としては、最も安全な財産保全策だったようです。でも隠した人が死んでしまうと、隠したこと自体が分からなくなってしまうので、誰かが思いがけずそれを見付けるとということが起こります。この譬えでは、畑を耕していた人が、隠された宝を思いがけず発見したのです。

宝を発見した人は、「その宝を見つけると、それを隠して」おきました。ローマ法やユダヤ法では、土地の前の持ち主の知らない宝が発見された場合、その宝は、土地の今の持ち主の所有となりました。ですからこの発見者の行為に問題はないのですが、そのようなことは、実はどうでもいいのです。この譬えの中心が、どんな犠牲を払っても惜しくない、畑の代価とは比べ物にならないほどの富を、発見者が得た、ということにあるからです。

(2) 「全部売り払って」

思いがけず宝を発見したのは、小作人かも知れません。彼は「それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。」

「お金を借りて」ではなく、「一部を売って」でもなく、「全部売り払って」ですから、決意のほどが伝わってきます。

この全力投入が、この譬えでは重要なのです。それも「買いなさい」という命令形ではなく、「買います」という、当然そうなるという形で、語られています。彼は「大喜びで」、もはやほかのことなど考えられないのです。

(3) 隠されている素晴らしい宝

神の支配は、この宝のように「ほかの人たち」の目から隠されているので、多くの人には知りません。耕して見付けた人、つまり聞く耳を持っている者にだけ、悟ることが許されるのです。

そして信仰によって神の支配を見出すと、それはどんな犠牲を払ってでも手に入れたくなるほどに、素晴らしい宝なのです。

2. 「良い真珠の譬え」

「神の支配で起こることは、良い真珠を捜している商人で起こることと同じです。」となります。

「良い真珠」は、「隠された宝」とよく似た形の譬えですが、一つだけ際立って違う点があります。それは、「宝」は思いがけず見付けられ、「真珠」はやっと捜し当てられた、ということです。

(1) 捜し続けて

今は養殖技術が進んだので、真珠は珍しい物でも高価な物でもなくなりましたが、当時、イスラエルに近い紅海沿岸では良質の天然真珠が採れなかったため、ペルシア湾やアラビア海の沿岸から輸入される「良い真珠」は、^{ぜいたく}贅沢の象徴のような物でした。

ですからこの商人は、遠くの土地まで旅をして、「良い真珠」を捜し続けて、やっと一つ捜し当てたのです。

(2) 「素晴らしい値うちの真珠」

もともと、「良い真珠」を捜している商人です。そんなに驚かなくても思うのですが、この真珠は期待を遙かに超えた、全財産と取り替えても惜しくないほどに、「素晴らしい値うちの真珠」でした。捜し続けていた真珠がついに見付かったのです。

(3) 「買ってしまいます」

「素晴らしい値うちの真珠」をやっと捜し当てたこの商人は、「宝」の譬えと同じように、ここでも全力投入です。もはやほかのことなど考えないで、「行って持ち物を全部売り払って」、当然のように「それを買ってしまいます。」

(4) 神の支配に出会う道

「宝」は偶然発見され、「真珠」は、捜し続けて発見されました。天の御国つまり神の支配に出会う道は一つではないのです。でも偶然であれ捜し続けてであれ、神の支配に出会った人は、自分のすべてに代えて、喜んでその恵みを受け入れます。それはその恵みが、想像を絶して大きいからです。

3. 二つの譬えと私たち

(1) 「素晴らしい値うちの」宝

この二つの譬えは、天の御国つまり神の支配が、「素晴らしい値うちの」宝であることを教えます。神の支配は、それを得るためにたとえどんな犠牲を払ったにしてもなお、私たちの努力を遙かに超える「素晴らしい値うちの」ものなのです。

(2) 「持ち物を全部売り払って」

それほどに「素晴らしい値うちの」ものだから、「持ち物を全部売り払って」でも、神の支配に^{あずか}与るとする^{はず}筈だ、とこの二つの譬えは教えます。

そうは言っても、ただ物質的なものの放棄を勧められているわけではありません。二つの譬えは、神の支配に^{あずか}与るといふ恵みを聞いて悟った者は、自分自身を進んで^{ささ}献げられるようになる、と言っているのです。

イエス様が弟子に「わたしよりも父や母 息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。」とお教えになり、パウロがピリピ人に「私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それをちりあくたと思っています。」と書いたのはこのことです。金持ちの青年は、自分自身を^{ささ}献げ切ることが出来なかったため、この恵みに^{あずか}与れなかったのです。

(3) 恵みに与る喜び

自分自身を^{ささ}献げ切るといふことは、「天に宝を積む」ために、自分のすべてを有効に使うということです。恵みに^{あずか}与るために自分のすべてを喜んで有効に使えるとということが、信仰の真の姿なのです。

地引き網と一家の主人

- 47 また、天の御国は、海におろしてあらゆる種類の魚を集める地引き網のようなものです。
- 48 網がいっぱいになると岸に引き上げ、すわり込んで、良いものは器に入れ、悪いものは捨てるのです。49 この世の終わりにもそのようになります。御使いたちが来て、正しい者の中から悪い者をえり分け、50 火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。
- マタイ13：47 - 50
(同13：24 - 30、37 - 43参照)
- 51 あなたがたは、これらのことがみなわかりましたか。」彼らは「はい。」とイエスに言った。
- 52 そこで、イエスは言われた。「だから、天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しい物でも古い物でも取り出す一家の主人のようなものです。」 同13：51 - 52
- 17 わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。同 5：17

ガリラヤ湖と地引き網：

「地引き網の譬え」は、「隠された宝」「良い真珠」に続けて、弟子たちに直接語られたものです。

「地引き網の譬え」の舞台となるガリラヤ湖は、ヨルダン川が北から流れ込んで南へ流れ出る湖で、南北が21km、東西が12kmあります。湖面は地中海の海面よりも211m下にありますが、淡水湖です。湖は丘に囲まれ、浜は湖に向かってなだらかに傾斜しているので、イエス様の舟からのお話を聞く群衆にとって、階段教室のようなものでした。

この湖で使われた地引き網は、長さ250～450m、幅2mほどで、長辺の一方には沈むように重りが、他方には浮くように軽い木が付けられていました。両端には引き網が付けられ、舟で仕掛けた網が一杯になると、引き網を引いて、岸に引き上げました。

1. 「地引き網の譬え」

「神の支配で起こることは、地引き網で起こることと同じです。」という譬えです。

(1) 警告の譬え

「地引き網」は、先行の四つの譬えと同じ「天の御国は、^{さば}のようなものです。」で始まりますが、「毒麦の譬え」で5回(28、29、30、40、41節)も使われた「集める」が48節に使われていること(48節では「入れ」と訳されていますが、原語は、聖書にあと2回しか出てきません。)と、この世に善人と悪人が混在していて、世の終わりに分けられる、という内容とによって、四つの譬えよりも「毒麦」に似た譬えとなっています。

でも「毒麦」そっくりではありません。「毒麦」を含め、これまでの六つの譬えが、神の支配の成長という視点からの話だったのに対し、「地引き網」は、世の終わりの審き^{さば}に焦点を絞って、厳粛に警告を与えているのです。

(2) 「地引き網」

詩篇66：11に、神がご自分の民を網に引き入れるとありますが、神の「地引き網」も、その網つまり福音宣教の網と言ってよいかも知れません。更に、福音が広がって生まれる共同体つまり教会を象徴する、と言うことも出来るでしょう。

(3) 「あらゆる種類の魚」

「地引き網」には、「あらゆる種類の魚」が集められます。「あらゆる」という表現には、神の支配が、イスラエルだけでなく、あらゆる国、あらゆる民族に広がる可能性が暗示されています。

(4) 「良いもの」も「悪いもの」も

「地引き網」には「良いもの」も「悪いもの」も入っています。「毒麦の譬え」と同様、この世での教会は、両者が混在する状態で存続するのです。

(5) 「岸に引き上げ」

「岸に引き上げ」という表現は、最終的な判決のために、世の終わりの審きの座に、すべての人が引き寄せられることを表わしています。

世の終わりには、「御使いたちが来て、」審きの座に引き寄せられたすべての人を、「正しい者」と「悪い者」とにえり分け、「正しい者」を神の国という「器」に入れ、「悪い者」を「火の燃える炉」に投げ込むのです。

(6)「地引き網の譬え」と私たち

イエス様は、義人ではなく罪人を、悔い改めのためにお招きになりました。罪人が神からの憐れみと恵みによって整えられて行くのが教会なのです。

私たちも「悪い者」であったことを思い出して、「悪い者」に対する神の憐れみを求めながら、審きの時に私たちが、「正しい者」として「器」に入れられる者であるように、救いの完成を待ち望む者でなければならないのです。

2. 「一家の主人の譬え」

「神の支配の弟子となった学者で起こることは、一家の主人で起こることと同じです。」

(1) 譬え話による説教の結び

イエス様は、天の御国についての説教を始められた時、弟子たちに「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されている(13:11)」と言われましたが、七つの譬え話による説教を終えられると今度は、「あなたがたは、これらのことがみなわかりましたか。」と、弟子たちの理解を直接お確かめになりました。

後にイエス様から「あなたがたも、まだわからないのですか(15:16)。」と叱られていますから、弟子たちの理解はまだ完全ではないのですが、他の人々に比べれば、より良い理解に達していました。

そこで弟子たちが「はい。」と答えると、イエス様は、説教の結びとしてもう一つの譬え話をお話しになりました。それが「一家の主人の譬え」です。

(2)「天の御国の弟子となった学者」

イエス様は、敵対する律法学者と比べる意味で、弟子たちを「天の御国の弟子となった学者」と呼ばれたのかも知れません。

弟子たちは、「天の御国の奥義を知ることが許されて」、イエス様の譬え話の持つ意味が分かるようになり、「隠された宝」や「良い真珠」を探り当て、神の支配の中に引き入れられています。

律法学者は、イエス様の教えを拒んで、旧約の教えの律法的解釈に固執していますが、弟子たちは、「無学な、普通の人(使徒4:13)」だったのに、イエス様の弟子となることによって、御国の知識を豊かに持つ者とされ、律法学者よりもすぐれた「学者」とされたのです。

(3)「新しい物でも古い物でも」

イエス様は、旧約の教えを実現させ成就するために来られて(5:17)、御国の奥義を弟子たちに示されました。「一家の主人の譬え」の「新しい物」とは、この御国の奥義を通して旧約の教えを読む、新しい理解のことで、「古い物」は、律法学者たちの古い捕われた理解のことで。

「弟子となった学者」は、イエス様に教えて頂いて、「自分の倉から新しい物でも古い物でも取り出す一家の主人のよう」に、「新しい物でも古い物でも」自由に取り出せるようになり、それを人に伝えることも出来るようになりました。

なお「古い、新しい」という自然な順序を逆にして「新しい物」を先にしているのは、「新しい物」を強調しながら、「古い物」に「新しい物」の光を当てることも示唆している、と言えます。

(4)「一家の主人の譬え」と私たち

「新約の神様は愛と赦しの神様、旧約の神様は義と怒りの神様。」と思い込んで、旧約聖書を敬遠する人が時々います。でもこの譬えは私たちに、旧約聖書と新約聖書が、互いに光を投げかけ合い、それぞれの中に隠されている真理を一層明らかにする、と教えています。

イエス様を信じ、イエス様に従おうとする者は、この二つを自由に取り出すことが出来るはず。取り出して、「永遠のいのち」という素晴らしい宝を人に伝えることを求められているのです。

成長する種

21 また言われた。「あかりを持って来るのは柀の下や寝台の下に置くためでしょうか。燭台の上に置くためではありませんか。22 隠れているのは、必ず現われるためであり、おおい隠れているのは、明らかにされるためです。23 聞く耳のある者は聞きなさい。」マルコ 4:21-23

24 また彼らに言われた。「聞いていることによく注意しなさい。あなたがたは、人に量ってあげるその量りで、自分にも量り与えられ、さらにその上に増し加えられます。25 持っている人は、さらに与えられ、持たない人は、持っているものまでも取り上げられてしまいます。」

同24-25

26 また言われた。「神の国は、人が地に種を蒔くようなもので、27 夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知りません。28 地は人手によらず実をならせるもので、初めに苗、次に穂、次に穂の中に実がはいります。29 実が熟すると、人はすぐにかまを入れます。収穫の時が来たからです。」

同26-29

13 かまを入れよ。刈り入れの時は熟した。来て、踏め。酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪がひどいからだ。ヨエル 3:13

マルコだけが記す譬え：

マタイ13章の天の御国についての譬えによる説教は、マルコでは、4:1-34に記されています。

マルコには、イエス様が舟からの説教を終え群衆と別れた後で、弟子たちに「種蒔きの譬え」の解き明かしと「あかり」「成長する種」「からし種」の三つの譬えをお話しになった、と記されています。

このうち「成長する種」は、マルコにしか記されていません。今回は、このマルコだけが記す譬えを学びます。

1. 「成長する種の譬え」の背景

イエス様は、「種蒔きの譬え」以降、謎を含んだ譬え話の形で神の国の奥義を話し始められました。その背景を、マルコの福音書で辿り直してみます。

(1) 律法学者の反感、殺到する群衆

イエス様は、宣教の傍ら、汚れた霊を追い出し、病人を癒されました(1:21-45、2:1-12)。癒しの御業を見た律法学者たちは反感を抱きました(2:6-7)が、群衆は、癒しを求めて殺到し、イエス様は食事の暇もないほどでした(3:20)。

一方取税人や罪人たちとの会食(2:15-17)、断食(同18-22)、安息日(同23-28)等の論争を経て、律法学者たちの反感は一層強まりました。

(2) 身内の者たちの無理解

身内の者たちが、イエス様は気が狂ったと思い、連れ戻そうとナザレから出て来ました(3:21)。

(3) 律法学者たちの非難

エルサレムから下って来た律法学者たちも、「彼は、ベルゼブルに取りつかれている。」とか「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ。」と言って、非難し始めました(同22)。

(4) 謎を含んだ譬え話

そのような中でイエス様は、謎を含んだ譬え話の形で話されるようになりました。「種蒔きの譬え」では、どのような態度で御言葉を聞いて受け入れるか、と群衆に問い掛けられました。

(5) 「成長する種」の直前のお話

イエス様は、「成長する種の譬え」に先立って、まず、弟子たちに「種蒔き」の解き明かしをされ、その中で、神様の力が、三十倍、六十倍、百倍の実を結ばせて下さるほどに大きい、ということをお示しになりました(4:14-20)。

続けて「あかりの譬え」では、隠れているものは必ず現われる、ということをお教えになりました。神の国の奥義が今は隠された形で示されているが、神の支配の下に生きる弟子たちが、それを明らかにする時が来る、と励まされたのです。

さらにイエス様は、「人に量ってあげるその量りで、自分にも量り与えられ、さらにその上に増し加えられます。」とお話しになりました。弟子たちには、神の国の奥義がさらに豊かに示される、だから出来るだけ大きな量りでこれを受け止め、ますます信仰を深めるように、と励まされたのです。

2. 成長する種の譬え (26 - 29)

これも神の国 (= 神の支配) についての譬えで、ここでは神の支配が、「人が地に種を蒔く」ことに譬えられています。

(1) 「どのようにしてか、人は知りません (27)」

蒔かれた種は、「芽を出して育ちます。」しかし「どのようにしてか、人は知りません。」農夫は、種がどのようにして育つかを知りません。もちろん種を成長させることも出来ません。彼はただ、種を蒔いた地で収穫を期待できることを信じて、「夜は寝て、朝は起き、」つまり自然の時の流れの中で、収穫の時を待っています。神の支配も、それを待ち望む信仰が必要なのです (15 : 43)。

(2) 「地は人手によらず実をならせるもの (28)」

「人手によらず」のギリシア語アウトマテーは、「おのずから」「ひとりで」とも訳されますが、神の「隠れた力」の働きかけによって、種の成長がもたらされることを指しています。

つまり神の「隠れた力」の働きかけによって、種が成長するのだから、人には、どのようにして育つか分からないのです。神の支配も神様がお育てになるのですから、「どのようにしてか」を人が知ろうと知るまいと、神の「隠れた力」によって育ち、「収穫の時」を迎えます。

「成長する種の譬え」は、「人手によらず (又は知らないうちに) 成長する種の譬え」なのです。

(3) 「初めに苗、次に穂、次に穂の中に実 (28)」

「芽」「苗」「穂」「実」と成長する過程は、ひそかで緩やかです。しかし種を地に蒔けば、順序を追って次第に成長し、やがて実を結ぶのです。

神の支配も、神の「隠れた力」によって成長し、完成に向かっていきます。「神の国の奥義が知らされている (4 : 11)」人は、今見えるものを、それが小さなものであっても、完成に向かっていくものの今の姿と見る事が出来ます。今見える小さなものを通して、やがて来るべき神の国を確信し喜ぶことが出来るのです。

(4) 「収穫の時が来たからです。 (29)」

29節は、ヨエル 3 : 13と平行する箇所、神の国が完成された時を表わしています。

「実が熟する」という表現は、神様が終末までの時を定めておられることを示しています。「収穫」も、元々完成を表わす言葉として使われる表現で、ここでは神の支配の完成 (= 終わりの時) を指しています。29節は、終末の審判を指しているのです。

ヨエル書が「収穫の時」を暗い響きで描いているのと違って、この譬えに明るい響きを感じられるのは、ここでイエス様が、「収穫の時」は必ず来る、しかも地での実りとおなじように、神の国においても多くの実りをもたらして下さる、だから信じて待ち望むように、と励ましておられるのだからです。

3. 「成長する種の譬え」と私たち

この譬えは、神の支配が既に始まっていて、神の「隠れた力」によって、完成に向かっていくことを教えながら、私たち一人一人に対する救いの完成がどんな性質のものであるか、をも示しています。

イエス様が来られて、神の支配が始まり、聖霊が降られて、神様を信じる人が世界に広がりました。神の支配は、歴史のうちに確かに働いています。神の「隠れた力」によって、私たちも「収穫の時」に向かって、整えられつつあるのです。

私たちは、その時にキリストと同じ姿に変えられる (ピリピ 3 : 20 - 21) ことを確信して、今を生きています。私たちがそのように生きることが、周りの人々への証しとなるのです。その生き方を見て、悔い改めて信仰に至るかも知れないからです。

良いサマリア人

25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」

26 イエスは言われた。「律法には、何と書いてありますか。あなたはどの読んでいますか。」

27 すると彼は答えて言った。「『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』とあります。」²⁸ イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」²⁹ しかし彼は、自分の正しさを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」

30 イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎとり、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。」

31 たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。³² 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。

33 ところが、あるサマリア人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、

34 近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。

35 次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。「介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。」

36 この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」

37 彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って同じようにしなさい。」

ルカ10：25 - 37

譬え話理解の歴史：

宗教改革より前の教会では、イエス様の譬え話をくわいゆ寓喩(allegory)として解釈しようとする試みが盛んでした。「良いサマリア人の譬え」についても苦心した末に様々の解釈が試みられました。例えばアウグスティヌス(354年 - 430年)は、

半殺しにされた人 = 墮落した人間、

良いサマリア人 = キリスト

包帯をすること = キリストによる罪の抑制、

油とぶどう酒を注ぐこと = 良き希望の慰めと

活発な働きへの勧め、

宿屋の主人 = 使徒パウロ、

デナリ二つ = 愛の二つの戒め。と解釈しました。

しかし宗教改革後は、聖書が語ることを文字通り受け止めるようになりました。

1. エリコへの道

エリコはエルサレムの東北東27kmほどの所にある町です。その間の街道は高低差が1,200mもあり、狭くて岩の多い坂道で、強盗も出る、難所でした。

2. 祭司とレビ人

エリコは、祭司が多く住んでいる町でしたから、「下って来た」祭司は多分、神殿での礼拝から帰宅する途中で、レビ人もそうだったのでしょう。

彼らは、無情だったからか、巻き添えを恐れたからか、あるいは死人に触れると一定期間身が汚れてしまう(レビ記21：1、民数記19：11)ので、職業意識からひんし瀕死の人が死人に見え、身が汚れないように避けたのか、とにかく見て見ぬ振りをしました。

3. サマリヤ人

前722年、北王国イスラエルがアッシリヤに征服された後に、この地を支配していた人々とユダヤ人との間に生まれた者の子孫がサマリヤ人です。

前5 - 4世紀、サマリヤ人は、純血主義のユダヤ人と分裂して、ゲリジム山に神殿を築きました。

前2世紀、シリアがユダヤ教を滅ぼそうとした時サマリヤ人は、シリア王をなだめるため、ゲリジム山にジュピター神を安置しました。

前128年頃、ユダの人々が、ゲリジム山の神殿を破壊しました。

前9 - 6年、サマリヤ人が、エルサレム神殿の庭に人骨をまき散らして、神殿を汚しました。

こうしてユダヤ人にとってサマリヤ人は、律法的に付き合ってはならない相手と考えられて(ヨハネ4: 9)、悪口としてイエス様をサマリヤ人と呼ぶ人まで出るようになったのです(同 8: 48)。

4. 律法学者の質問

良いサマリヤ人の譬えは、「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」という律法学者の質問をきっかけにイエス様が話されたものです。イエス様が「それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」と迫ったことで明らかのように、律法学者は、律法を知って守っている積もりで、イエス様を攻撃しようとしてこの質問をしたのです。

5. 「隣人」に対する理解

当時のユダヤ人は「隣人」を限られた範囲の人に限っていました。だから彼は「隣人」を愛している積もりです。

それに対してイエス様は、範囲を限って「隣人」を考えてはいけない、「隣人」とは、律法のある憐れみによって自分の方からそうなるもので、愛の範囲には限りがないのだ、ということをお示しになったのです。

6. 「良いサマリヤ人の譬え」

恐らくユダヤ人です。ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われ半殺しにされました。最初に祭司、次にレビ人が通りかかりますが、彼らは、見て見ぬ振りをして通り過ぎました。

ところが、サマリヤ人の旅人が、彼を見てかわいそうに思い、オリーブ油とぶどう酒で傷を手当し、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行って、介抱してやりました。翌日彼は、デナリ二つ(二日分の労賃に相当)を宿屋の主人に渡して、世話を頼み、足りなければ帰りに立ち寄って支払う、と約束します。

祭司とレビ人は、被害者を「隣人」とは見ないで見捨てましたが、ユダヤ人に「隣人」扱いされてもいないサマリヤ人が、瀕死のユダヤ人の「隣人」となって、「帰りに」まで彼の「隣人」であることを「宿屋の主人」に約束したのです。

7. 「あなたも行って同じようにしなさい。」

「この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」とイエス様に問われた律法学者は、「サマリヤ人」とは言いにくかったのでしょうか。「その人にあわれみをかけてやった人です。」と答えます。すかさずイエス様は、「あなたも行って同じようにしなさい。」と命じられます。助けを必要としている人の「隣人」に、あなたの方からなりなさい、とお教えになったのです。

8. 「良いサマリヤ人の譬え」と私たち

イエス様は、罪人である私たちに代わって十字架にかかり、ご自身の愛を実行して下さいました。そのお方が「あなたも行って同じようにしなさい。」と言っておられるのです。

最小限度の責任を果たすことで信仰を守っているとは言えません。民族や宗教が異なっても、たとえ敵であっても、助けを必要としている人がいたら、主の名によって助ける機会が与えられたと考えて、私たちは、その人の「隣人」になるのです。

真夜中の友人

- 1 さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」
- 2 そこでイエスは、彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。3 私たちの日ごとの糧を毎日お与えください。4 私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負いめのある者をみな赦します。私たちを試みに会わせないでください。』」ルカ11：1-4
(マタイ6：9-13参照)
- 5 また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人のところに行き、『君。パンを三つ貸してくれ。6 友人が旅の途中、私のうちへ来たのだが、出してやるものがないのだ。』と申したとします。7すると、彼は家の中からこう答えます。『めんどろをかけないでくれ。もう戸締まりもしてしまったし、子どもたちも私も寝ている。起きて、何かをやることはできない。』
- 8 あなたがたに言いますが、彼は友だちだからということで起きて何かを与えることはしないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう。
- 9 わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。10 だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。同5-10(マタイ7：7-8参照)
- 11 あなたがたの中で、子どもが魚を下さいと言うときに、魚の代わりに蛇を与えるような父親

が、いったいいるでしょうか。12 卵を下さいと言うのに、だれが、さそりを与えるでしょう。

- 13 してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さないことがありますでしょう。」 同11-13

(マタイ7：9-11参照)

「あなたがたのうち、だれか」：

「祈りを教えてください(1節)」という弟子の願いに^{こた}応えて、イエス様は、主の祈り(2-4)によって「何を祈るべきか」をお教えになり、続けて譬え話(5-10)の形で「どのように祈るべきか」を教えてくださいました。

譬え話の「あなたがたのうち、だれか(5)」という語り出しは、何か淡々とした口調のように聞こえますが、原文は「真夜中に助けを求められた友人が、^{ほう}放っておくだろうか。そんな人はいる^{はず}筈がない。」という、断定的な口調になっていて、その口調が、「子の願いを父が放っておくだろうか。」「まして、天の父が黙って放っておく筈がないではないか。」と展開する(11-13)のです。

このことをはっきり受け止めておかないと、祈りについて教える中でイエス様が「真夜中の友人の譬え」をお話しになった意味が分からなくなってしまう。つまり友人に頼み込むのも、父に願うのも、天の父に求めるのも、聞き入れられるという確信の中で、熱心にそうするのです。

1. 「必要な物を与えるでしょう。」

(1) 「友人が旅の途中、私のうちへ来た」

当時のパレスチナ地方では、昼の日差しを避けて夕方から夜にかけて歩きました。電話も郵便もない時代なので、そういう旅人が真夜中に突然、泊めてくれとやって来たのです。彼は、汗と埃に^{ほこり}まみれ、疲れていて、そのうえ空腹です。

(2)「君。パンを三つ貸してくれ。」

真夜中に空腹の旅人を迎えた人は、旅人の空腹をすぐにも癒して上げたかったのですが、自分の家に食事の用意がないので、気心の知れた友人の家の戸を叩いて、「パンを三つ(「日ごとの糧」に相当)貸してくれ。」と頼み込みます。

(3)「あくまで頼み続けるなら、」

頼み込まれた友人にも都合があります。一間しかない部屋で、家族が雑魚寝しているのです。戸を開けようとして、枕元で明かりをつけたり、かんぬきを外したりしたら、みんなを起こしてしまいます。それで、初め彼は断ります。でも借りに来た人は、彼の友情を信じ、旅人の空腹を癒して上げたい一心から、「あくまで頼み続け」ます。

頼み込まれた友人は、友達という人間関係だけでは「起きて何かを与えることはしない」けれども、頼み込む方が「あくまで頼み続けるなら、」結局は心を動かされて、「起き上がって、必要な物を与えるでしょう。」とイエス様は言われます。

2. 「あなたがたに言いますが、」

これは弟子たちに強調するための、イエス様の前置きです。熱心に頼み続ければ、人間の友人でさえ結局は「必要な物を与える」ではないか、まして父なる神は、熱心な祈りに必ず応えて下さるお方だ、と強調して言っておられるのです。直ちに応えられなくても、忍耐をもって祈り続けることを、教えておられるのです(テサロニケ 5:17参照)。

3. 「わたしは、あなたがたに言います。」

イエス様は、今度は「わたしは、」を付けて、さらに強調して言われます。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」

「求めなさい。」確信を持って祈るとき、祈りは「捜しなさい。」「たたきなさい。」という具合に、より明確な行動へと展開して行きます。

「捜しなさい。」は、祈りが聞かれる時まで求め続ける積極的な行動が必要であることを教えます。

「たたきなさい。」は、門をたたく忍耐と継続、そして聞かれることへの確信が必要であることを、強調しておられるものと思われま

4. 「どうして聖霊を下さらないことが」

イエス様は弟子の願いに応え、主の祈りによって「何を祈るべきか」を、譬え話によって「どのように祈るべきか」を、お教えになりましたが、さらに続けて一つの約束をして下さいました(11-13)。

人間は、神様から見れば「悪い者」に違いありませんが、子供を怖がらせたり傷つけたりする、蛇やさそりを与えたりはしません。魚や卵など、子供の欲しがる物を与えることを知っています。

「悪い者」人間の父親でさえそうなのですから、「なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがあります。」父なる神の思いは、子供を思う父親の思いに勝るのです。神様の愛を信じて熱心に祈り求めれば、天の父は、人間の父親が与える日ごとの糧を備えて下さるだけでなく、霊の糧である「聖霊」をも与えて下さる。これが、イエス様の与えて下さった約束です。

聖霊は私たちと共にいて下さり、御心を教えて下さり、御心を実行するための力を与えて下さるお方です。その、神様からの最高の賜物、聖霊(ヨハネ 16:7参照)を与えて下さるということです。

5. 「真夜中の友人の譬え」と私たち

この譬えは、友人や親と天の父なる神との比較から、私たちの祈りが必ず聞かれることを教えてくれます。「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です(ヨハネ 5:14)。」とあります。私たちは、御心を求めながら、最善のものをもって応えて下さる神様に、確信を持って祈り続けるのです。

愚かな金持ち

- 13 群衆の中のひとりが、「先生。私と遺産を分けるように私の兄弟に話してください。」と言った。14 すると彼に言われた。「いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停者に任命したのですか。」15 そして人々に言われた。「どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」
- 16 それから人々にたとえを話された。
「ある金持ちの畑が豊作であった。」
- 17 そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。
『(私は)どうしよう。(私には)(私の)作物をたくわえておく場所がない。』18 そして言った。
『こうしよう。(私は)あの(私の)倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、(私の)穀物や財産はみなそこにしまっておこう。』
- 19 そして、自分のたましいにこう言おう。
「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」
- 20 しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』
- 21 自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」 ルカ12:13-21

「愚かな金持ちの譬え」の背景

ルカ12章でイエス様は、弟子たちに教えておられます。弟子たちは、神の国を待ち望みながら、今はこの世で様々な問題に直面します。そのような中で証人としてしっかりと世に立つこと(1-12)と生活のことに心を奪われずに神の国を求めること(13-31)をお教えになり、この世に属さない者としての生き方(価値観)を示されたのです。

1. 「人のいのちは財産にあるのではない」

(1) 「先生。」

群衆の中のひとりが、イエス様のお話に割り込むような形で、遺産争いについての調停をお願いしました。当時は、民事上の争いについて律法学者に意見を求めるということが行なわれていました。彼が「先生」と呼び掛けて調停を求めたのは、イエス様に同じ期待を掛けたからなのです。

(2) 「遺産を分けるように」

遺産分配については、申命記21:15-17に定められています。でもこの人は、遺産の中の彼の相続分を兄弟から横取りされたようです。それでイエス様に、何とかして下さいと頼み込んだのです。

(3) 「いったいだれが」

いつもはどんな質問にもお答えになり、求める者にはお与えになるイエス様が、この人の頼み事は、お断りになりました。何故でしょうか。

「いったいだれがわたしをあなたがたの裁判官や調停者に任命したのですか。」というお言葉から、ご自身が宣教者であって、律法学者ではないことを示しておられるようでもあります。でも次の一言でもっと深い意味があることが示されました。

(4) 「どんな貪欲にも注意して、」

イエス様はここで、その人にではなく、他の人々に向かってお話しになりました。「どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」

「貪欲」の原語は「もっと多い」と「所有する」という言葉の合成語です。ここでイエス様は、財産を持つてはいけないと言っておられるのではなく、「貪欲」に取り付かれ、もっと欲しいという欲望に支配されて、神の支配から切り離されてしまうことを戒めておられるのです。

イエス様は、遺産争いについての調停を頼み込むこの人の本当の問題が、実は「貪欲」に根差すものであることを、見抜かれたに違いありません。

(5)「人のいのちは」

「貪欲」に取り付かれた人は、欲しいものを手に入ると今度は、自分のいのちが、手に入れたものから出て来るかのような錯覚に捕らわれます。でも「人のいのちは財産にあるのではない」のです。

そこでイエス様は、遺産をどう分配するかという処世の問題としてではなく、人間にとって真に必要なものは何かという根本的な問題として取り上げ、譬えでお諭しになったのです。

2. 「愚かな金持ちの譬え」

(1)「ある金持ちの畑が豊作であった。」

天候に恵まれ、病虫害も出なかったし、よく働きもしたので、畑は豊作でした。何か問題があるのでしょうか。

(2)「どうしよう。」

豊作となり、さらに金持ちになる。そのこと自体には何の問題もないのですが、どうもこの金持ちは豊作が神様の恵みであることを忘れてしまったようです。彼の頭の中は、山積みの倉のことで、一杯になってしまいました。

(3)(私)

日本語の聖書は、全部を訳出してはいませんが、原文の17 - 19節は、(私は)どうしよう、(私には)、(私の)作物、(私は)、(私の)倉、(私の)穀物や財産、自分のたましい、という具合に、(私)という言葉が何回も出てきます。財産だけでなくたましいまでも自分で支配できると思い込んでしまったのです。

(4)「自分のたましいにこう言おう。」

「たましい」の原語プシュケーは、生命とも訳されますが、肉体的な生命とは違って、全人格に結び付くような生命です。これで当分は食べて行ける、という素朴な安心感ではなく、「たましい」の安全まで保障された、というような意味が込められています。イエス様は「貪欲」に支配されてしまっている姿を示すために、ただの独り言としてではなく、このような表現を使っておられるのです。

(5)「安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」

金持ちは、長年分の蓄えが出来たと有頂天です。「安心しろ、食べ、飲め、楽しめ。(直訳)」と、一気に「自分のたましい」に語り掛けます。

(私)(私)と言い続ける金持ちの心からは、神様への感謝も、隣人への愛も、消えてしまっています。だから「自分のたましい」に向かって、自分で安全宣言までしてしまうのです。

(6)「愚か者。」

譬え話としては珍しいことですが、この譬えには神様が登場します。死の宣告のためです。神様は、「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。」と宣告されるのです。「これから先何年」もと思ったのに、「今夜」という宣告です。

ここまで読み進むと、イエス様が頼み事をお断りになった真の意味が、見えて来ます。イエス様は、遺産問題の渦中で自分を見失っている人に、「自分のたましい」を取り戻させようとして、この譬えを語っておられたのです。

3. 「神の前に富まない者」

イエス様は「自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」と言って、譬えを締め括られました。つまり人生の最大の目標は、「神の前に富む者」となることだと教えておられるのです。イエス様に頼み事をした人にとっての真の解決策は、実はここにあったのです。

4. 「愚かな金持ちの譬え」と私たち

この譬えは終わりの日に備えて生きる私たちに、「神の前に富む者」となるべきことを教えます。

イエス様によって神様を知って、与えられた恵みに感謝して生きる私たちは、自分のために宝を積む思い煩いから解放され、「日ごとの糧(11:3)」を求めながら、与えられた恵みを分かち合い、励まし合いながら、「天に宝を積む(18:22)」道を歩むのです。

実のならないいちじく

- 1 ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て、イエスに報告した。ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜたというのである。
- 2 イエスは彼らに答えて言われた。「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとも思うのですか。」
- 3 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。
- 4 また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとも思うのですか。」
- 5 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」 ルカ13：1-5
- 6 イエスはこのようなたとえを話された。
「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。実を取りに来たが、何も見つからなかった。」
- 7 そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年もの間、やって来ては、このいちじくの実のなるのを待っているのに、なっていたためしが無い。これを切り倒してしまいなさい。何のために土地をふさいでいるのですか。』
- 8 番人は答えて言った。『ご主人。どうか、ことし一年そのままにしてやってください。木の回りを掘って、肥やしをやってみますから。』
- 9 もしそれで来年、実を結べばよし、それでもだめなら、切り倒してください。』」

同 6 - 9

1. 悔い改めの勧め(1-5)

(1)「ちょうどそのとき(1)」

イエス様が来られて神の国が近付いたということは、見方を変えると、神の国に入る者と入れない者とが分けられる時が来たということでもあります。つまり福音の宣教は、すべての人に悔い改めを迫る神様からの警告でもあるのです。

それでイエス様は、審きが始まってからでは、助けを求めても遅すぎるから、今は何をなすべきかを判断し、悔い改めて、神様の前で今を生きるべきだと警告されました(12:49-59)。「ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て、」イエス様に一つの事件を報告しました。

(2)「ピラトがガリラヤ人たちの血を(1)」

その報告は、神殿の庭で犠牲の動物をほふっていたガリラヤ人たちが、ピラトの兵士たちに殺されたというものでした。

(3)「そうではない(2-3)。」

報告した人たちは、殺された人々を憐れんだのではなく、ガリラヤ人たちは、罪深かったのが不幸に遭ったが、不幸に遭ってない自分たちは罪深くないのだ、と考えたのです。この考え方こそ問題です。

イエス様は「そうではない。」と強い口調で否定されて、みな罪人であるから悔い改めることが必要だ、と強く勧められました。単なる反省ではなく、考え方・生き方の方向転換を迫られたのです。

(4)「シロアムの塔が倒れ落ちて(4-5)」

イエス様は、最近の事件を取り上げられました。「シロアムの塔が倒れ落ちて死んだ」18人のことです。このような不慮の事故にしても、当時は罪の結果と見るのが一般的でした。ここでもイエス様は「あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」と強くお勧めになったのです。

2. 実のならないいちじくの譬え(6-9)

イエス様は、悔い改めの強い勧めに続けて、この譬えをお話しになりました。

(1)「ぶどう園にいちじくの木を(6)」

ぶどう園といちじくの木は、イスラエルを象徴するものとして、旧約聖書には、しばしば出てきます(列王4:25、ホセア9:10、イザヤ5:1-7、エレミヤ8:13、24:3、ミカ7:1-4ほか)。

当時のぶどう園は、今の棚作りと違って、ぶどうを地面に這わせたり、立ち木に絡ませたり、していました。実を食べられるいちじくが、立ち木としてよく使われました。それで「ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。」ということになるのです。

(2)「実を取りに来たが、何も(6)」

原文の「いちじくの木」は単数です。ぶどう園に一本だけ植えられた「いちじくの木」はイスラエルを暗示します。イスラエルに実(悔い改め)がなるのを楽しみにしていたのに、「実を取りに来たが、何も見つからなかった。」と、主人は、番人を責めるのです。いちじくの木(イスラエル)は、主人の期待に応えられなかったのです。

(3)「切り倒してしまいなさい(7)。」

主人の期待に反して、いちじくの木には三年間も実がならなかったのです。期待が大きかっただけにいらだちも大きく、主人は番人に怒鳴りつけます。「これを切り倒してしまいなさい。何のために土地をふさいでいるのですか。」

実のならないいちじくの木は、ぶどう園の立ち木としては失格で、切り倒して捨てるのは当然です。「三年もの間」という言葉は、イスラエルに対する神様の忍耐を暗示します。また「切り倒して」捨てるということは、神様の忍耐が終わる時に下される最後の審きを意味します(マタイ3:10)。

(4)「ことし一年そのままに(8)」

「切り倒してしまいなさい。」という主人の命令に対して番人は、「どうか、ことし一年そのままにしてやってください。木の回りを掘って、肥やしをやってみますから。」と懇願します。「掘って、肥やしを」やるのは、実がなるようにしようとする、憐れみ深い配慮です。

三年間も実のならなかった木の回りを掘って、肥やしをやって」も実を期待することは出来ないかも知れません。しかし最後までイスラエルに注がれる愛情と期待とによって、神様の窮極的な関心がイスラエルの審きにあるのではなく、救いにあることが暗示されています(23:34参照)。

(5)「それでもだめなら(9)。」

「もしそれで来年、実を結ばばよし、それでもだめなら、切り倒してください。」この答えは、実を結ぶことの責任が木にあることを強調しています。番人が最善を尽くして世話をしても、実を結ぶかどうかは木の状態によるからです。

なお「来年」という言葉は、悔い改めるために残された期間が定まっていることを教えます。つまり審きまでの期間は限られているのです。

3. この譬えの中心点

肥やしをやった木は、実を結んで残されたのか、結ばずに切り倒されたのか、この譬えでは話されていません。譬えの中心点はここにはないのです。

イエス様は審きの警告(12:49-59)に続けて、悔い改めの強い勧め(13:1-5)をされ、さらにその勧めに続けて、神様が忍耐して下さっているという、この譬え(6-9)を話されました。

三年間も実のならなかったいちじくの木を、駄目かも知れないのに、もう一年待つて下さるといふ、憐れみ深さ(忍耐)の譬えです。神様は、多くの人に悔い改めの機会を与えるために待つておられるのです。このことこそ、この譬えの中心点です。

4. この譬えと私たち

切り倒されて当然の、私といういちじくの木は、十字架の死という形で代わりに切り倒されたイエス様の執り成しによって、もう一年、もう一年、と生かされています。私たちは、この神様の憐れみ深さの中に生かされていることを覚えて、お導きを祈り求めながら、今を精一杯生きるのです。

上席と末席、食事の招待

- 1 ある安息日に、食事をしようとして、パリサイ派のある指導者の家にはいられたとき、みんながじっとイエスを見つめていた。
- 2 そこには、イエスの真正面に、水腫をわずらっている人がいた。
- 3 イエスは、律法の専門家、パリサイ人たちに、「安息日に病気を直すことは正しいことですか、それともよくないことですか。」と言われた。
- 4 しかし、彼らは黙っていた。それで、イエスはその人を抱いて直してやり、そしてお帰しになった。
- 5 それから、彼らに言われた。「自分の息子や牛が井戸に落ちたのに、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者があなたがたのうちにいるのでしょうか。」⁶ 彼らは答えることができなかった。 ルカ14： 1 - 6
- 7 招かれた人々が上座を選んでいる様子に気づいておられたイエスは、彼らにたとえを話された。
- 8 「婚礼の披露宴に招かれたときには、上座にすわってはいけません。あなたより身分の高い人が、招かれているかもしれないし、⁹ あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください。』とあなたに言うなら、そのときあなたは恥をかいて、末席に着かなければならないでしょう。
- 10 招かれるようなことがあって、行ったなら、末席に着きなさい。そうしたら、あなたを招いた人が来て、『どうぞもっと上席にお進みください。』と言うでしょう。そのときは、満座の中で面目を施すこととなります。¹¹ なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」同 7 - 11

12 また、イエスは、自分を招いてくれた人にも、こう話された。「昼食や夕食のふるまいをするなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどを呼んではいけません。でないと、今度は彼らがあなたを招いて、お返しすることになるからです。¹³ 祝宴を催すばあいには、むしろ、貧しい人、不具の人、足なえ、盲人たちを招きなさい。¹⁴ その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。義人の復活のときお返しを受けるからです。」 同12 - 14

ルカ14章の背景

イエス様の受難が間近に迫ったころのことです。パリサイ人や律法学者たち敵対者の憎しみは、相当高まっています。彼らはイエス様を、わなに掛けてでも捕らえて、ローマ権力の裁判に引き渡そうと、色々考え始めています。

そのような中で14章では、イエス様が、安息日に「パリサイ派のある指導者(会堂の管理者、議会の議員とも訳せる言葉)」の家に食事に招かれると、「イエスの真正面に、水腫をわずらっている人」を座らせて、「律法の専門家、パリサイ人たちが、「じっとイエスを見つめて」いました。

ルカ 6： 1 - 11や13： 10 - 17でも安息日が論争の種になりましたが、今彼らは、イエス様が病人を直されたら、安息日の問題で、イエス様を訴えようとしているのです。

規定の文句に縛られて、何のために安息日があるかを忘れた彼らは、イエス様の「安息日に病気を直すことは正しいことですか、それともよくないことですか。」という質問に、言葉を返せません。

イエス様は病人を直してお帰しになると、宴会に招かれた人々には「上席と末席(7 - 11)」、招いた人には「食事の招待(12 - 14)」、その場にいたすべての人々には「盛大な宴会(15 - 24)」という三つの譬えをお話しになって、彼らの抱える問題を指摘されました。

1. 上席と末席の譬え (7 - 11)

イエス様は、食事に招かれた人々が上席を選んで座ることを取り上げて、彼らが律法を守ると言いながら見失っていることが何かをお教えになります。

イエス様は彼らの、律法を守る自分を誇り、守れない者を見下す、つまり自分のために律法を守っている利己主義的な姿勢と、彼らが上席を選ぶ様子とを重ね合わせて見ておられたのです。

(1) 「招かれた人々が上座を選んでいる (7)」

「婚礼の披露宴」で上座を選ぶ人が、自分を上座に着くのにふさわしいと思う姿は、律法を守る自分こそ神の国の食卓でも上席に着く資格ありと思う、パリサイ人や律法学者の姿に通じています。

(2) 「そのときあなたは恥をかいて、(8 - 10)」

8 - 10節の本文を表面的に読むと、初めに上席を選ぶと、末席に移されて恥をかくことがあるから、とにかく末席に着いて、上席に移されるのを待つ方が賢明である、と言われているように見えます。

でも上席に移されるのを待ちながら末席に着く、というのではどうも変です。ここで教えておられるのが、そのような処世術ではなくて神の国の真理であることが、続く11節で明らかにされます。

(3) 「だれでも自分を高くする者は低くされ、

自分を低くする者は高くされる (11)」

「低くされ、高くされる」と受動態で語られているのは、人の値打ちが、律法を守ったか人々に評価されているかによってではなく、神様によって決められることだからです。

神様が恵みとして与えて下さる救いは、自分にはその資格がないと認める者にだけ、与えられます。神の国に招かれている人は、御心を思って、必然的に自分を低くするのです。

上席を選びたがる人は、神様抜きで自分の物差しだけで生きているので、神の国でも、自分は上席にふさわしいと考えます。このように、自分にはその資格があると思いついでいる人は、神の国に入れても頂けないのです。

2. 食事の招待の譬え (12 - 14)

宴席にイエス様を招いてくれた、「パリサイ派のある指導者」も、自分の地位にふさわしい人だけを招いて、宴席を自己顕示の場としていたようです。イエス様は、彼にも譬えでお教えになります。

(1) 「金持ちなどと呼んではいけません。(12)」

食事の席に招かれていたのは、イエス様のほかはパリサイ人や律法学者、それに支配層の金持ちだけだったようです。つまりイエス様のほかは、お返しを期待できそうな人ばかりでした。イエス様はそのことを取り上げて、関心の範囲を自分に関わりのある範囲に限るな、と言われるのです。

(2) 「貧しい人、 を招きなさい。(13)」

罪人で、病人で、貧しい人で、何一つ応えることの出来なかった私たちを、一方的に神様が憐れんで下さったように、恵まれた食卓につくことが出来ずにいる人たちを、利己的な意図のない、愛の行為として、食卓に招くように勧められます。

(3) 「義人の復活のときお返しを受ける (14)」

それだけではありません。お返しの出来ない人を招くと、その人からは報いは来ないけれども、神様がふさわしく報いて下さいます。信仰をもってその報いを待てる人の行為を通して、神様の愛がこの世に示されるのです。イエス様は、このことを心に留めるように、と強調されたのです。

3. 二つの譬えと私たち

この二つの譬えは、神の国に招かれている人が持つ賢さというものを、私たちに教えてくれます。

「上席と末席の譬え」では、一人一人の値打ちは神様がお決めになることで、「自分を低くする」ことこそ、神の国に招かれている人の持つべき精神的側面であることを、教えられます。

「食事の招待の譬え」では、自己顕示の行為ではなく、神様から憐れまれたことを覚えて行なう愛こそ、神の国に招かれている人の行なうべき行為であることを、教えられます(ルカ12:33参照)。

盛大な宴会

- 15 イエスといっしょに食卓に着いていた客のひとりはこの話を聞いて、イエスに、「神の国で食事する人は、何と幸いなことでしょう。」と言った。
- 16 するとイエスはこう言われた。
「ある人が盛大な宴会を催し、大ぜいの人を招いた。17 宴会の時刻になったのでしもべをやりに、招いておいた人々に、『さあ、おいでください。もうすっかり、用意ができましたから。』と言わせた。
- 18 ところが、みな同じように断わり始めた。最初の人はこのように言った。『畑を買ったので、どうしても見に出かけなければなりません。すみませんが、お断わりさせていただきます。』
- 19 もうひとはこう言った。『五くびきの牛を買ったので、それをためしに行くところです。すみませんが、お断わりさせていただきます。』
- 20 また、別の人はこう言った。『結婚したので、行くことができません。』
- 21 しもべは帰って、このことを主人に報告した。すると、おこった主人は、そのしもべに言った。『急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい人や、不具の人や、盲人や、足なえをここに連れて来なさい。』
- 22 しもべは言った。『ご主人さま。仰せのとおりにいたしました。でも、まだ席があります。』
- 23 主人は言った。『街道や垣根のところに出かけて行って、この家がいっぱいになるように、無理にでも人々を連れて来なさい。』
- 24 言うておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は、ひとりもいないのです。』」 ルカ14：15 - 24
(マタイ22：1 - 14参照)

当時の招待：

当時、人を宴会に招待する時には、前もって招待しておいて、宴会の時間になったら、初めの招待を受けた人に改めて声を掛ける、というのが一般的でした。二度目の招待をしないのは、一度目の招待を取り消すのに等しい無礼な仕打ちでしたし、二度目の招待を客が断るのも、とても失礼なことでした。

1. 「神の国で食事する人は、何と幸いな(15)」
ユダヤ人はイザヤ25：6、55：1-3をもとに、メシヤがこの世に来られると、盛大な宴会を催してユダヤ人だけを招いて下さる、と信じていました。
ですから「あなたは幸いです。義人の復活のときお返しを受けるからです(14：13)。」と話されたイエス様に、「神の国で食事する人は、何と幸いなことでしょう。」と話しかけた「客のひとり」だけでなく、恐らくその場にいたすべての人が、自分は神の国の食卓に招かれている、と信じていました。
イエス様は、その危険な自己満足を取り上げて、譬え話で警告されたのです。

2. 盛大な宴会の譬え(16 - 24)

(1)「言うておくが、(24)」

譬え自体は、23節の「主人」の話で終わります。24節の「言うておくが、」は直訳すると「わたしはあなたがたに言うが、」となり、「主人」ではなくイエス様ご自身が、「しもべ」ではなく、すべての聞き手に、語っておられるからです。

イエス様は23節までの譬えの結論として24節で、神の国の食事への招きは、今すぐ応えるべき緊急の招きで、わたしの招きから逃げているあなたがたは招かれない、と警告しておられるのです。

この譬えは、この警告のために語られた、と受け止めた上で、読む必要があります。

(2)「さあ、おいでください。(17)」

主人は二度目の招待をするため、一度目の招待を受けた人々に、しもべを差し向けます。

(3)「みな同じように断わり始めた。(18-20)」

ところが一度目の招待を受けた人々は皆、二度目の招待を断りました。「みな同じように(18)」という言葉で、意外にも一人残らず断ったという事態の深刻さが暗示されています。

断る理由にしても、

「畑を買ったので、」畑は取得済みで、もう買い損なう心配はありません。今こそ心おきなく宴会に出席できる筈です。

「五くびきの牛を買ったので、それをためしに」最初の招待を受け入れたのですから、招待された日時に牛の世話などしなくてもいい筈です。

「結婚したので、」申命記24：5に「人が新妻をめぐらしたときは、その者をいくさに出してはならない。」とありますが、今彼が招かれているのは戦争ではなく宴会です。という具合でどれも、理由と呼べるようなものではありません。二度目の招待までには十分な時間があつたのにですから、一方的に断る無礼な姿が強調されています。

前もって招かれていたのに、いよいよその時が来ると、こんな言い訳で断るのですから、彼らが実は主人を軽蔑し、約束を無視して、自分のことの方を大事にしている、ということでもあります。

招待を受けた者が宴会に出席するのは当然です。イエス様は、招かれたことを自慢するだけで招きには応じないというこの譬えで、パリサイ人だから、ユダヤ人だから、「神の国で食事」できると考えることに、警告を与えておられるのです。

(4)「町の大通りや路地に(21)」

しもべの報告を受けた主人は、「急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい人や、不具の人や、盲人や、足なえをここに連れて来なさい。」と言い付けます。招待客が断ったので、今度は日頃ユダヤ人から疎外されている人々を招け、というのです。主人の怒りの激しさが窺われます。

貧しい人や、不具の人や、盲人や、足なえに対する招きは急なものでしたが、断る者はありません。

(5)「街道や垣根のところに(22-23)」

「でも、まだ席があります。」という報告を受けた主人は、今度は、「街道や垣根のところに外へ出て行って、」つまり町の外れにいる異邦人を「無理にでも」連れて来なさい、と言い付けます。「無理にでも」で、招かれる人の範囲の更なる拡大と、招きの緊迫性が示唆されています。

最初に招待されたのに断った人々は、「この家がいっぱいに」なっていて、もう間に合いません。

3. 価値観の大転換(24)

イエス様は「あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は、ひとりもいないのです。」と念を押しておられます。こうして「盛大な宴会」は、招待されていた人が一人も出席しないで、招待される筈がないと思われていた人だけが招かれて、始まるのです。

「食事の招待の譬え」の、「友人、兄弟、親族、近所の金持ちなど」を招かないで、「貧しい人、不具の人、足なえ、盲人たちを招きなさい。」という教えは、このような価値観の大転換を迫るもので、パリサイ人たちが、自分たちがそのままで神の国の食卓に着けると思い込んでいることは、大きな間違いだったのです。イエス様がこの招待の異常な場面を語られたのも、この価値観の大転換を気付かせるためだった、と思われまふ。

4. 「盛大な宴会の譬え」と私たち

たとえ招いておいた人が一人も出席しなくても、「盛大な宴会」は必ず開かなければならないという「主人」の異常とも言える熱意は、御国を完成しようとされる強い御心を示しています。また招かれたから当然そこに入れると思込んでいる人々には、招かれたことと入れることは別のことで、「主人」に不従順や不信仰を抱いていては、そこに入れないと教えられています。私たちも招かれた者として、招きにふさわしい従順が求められているのです。

弟子となる道

25 さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いていたが、イエスは彼らの方に向いて言われた。

26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができます。27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。

28 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちひとりでもあるでしょうか。

29 基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、30 『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかった。』と言うでしょう。

31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。32 もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。

33 そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。

34 ですから、塩は良いものですが、もしその塩が塩けをなくしたら、何によってそれに味をつけるのでしょうか。

35 土地にも肥やしにも役立たず、外に投げ捨てられてしまいます。聞く耳のある人は聞きなさい。」

ルカ14：25 - 35

三つの譬えによる「弟子となる道」：

招待を断った客が締め出されて宴会への出席者が拡大される、と話してパリサイ派の指導者の家を出られたイエス様に、大勢の群衆が付いて来ました。彼らは、イエス様がエルサレムに上ってメシヤ王国の王になると勘違いして、あこがれに似た気持ちで付いて来ているようです。

彼らに対してイエス様は、「塔を築く人」「敵と戦う王」「塩」という三つの譬えで、弟子となる道の厳しさをお話しになって、決心する前によく考えて、最後まで成し遂げる覚悟が出来てから、付いて来なさい、と警告されました。

1. 弟子となる道の厳しさ(25 - 27)

イエス様の弟子となることは、召しに応えることから始まりますが、イエス様はさらに、「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることはできません。」と言われます。

「憎む」の原語ミセオーには、憎しみを持って「憎む」、のほかに、一方を重んじて他方を「軽んじる」、一方を多く愛して他方を「より少なく愛する」、一方を選んで他方を「選ばない」、という意味があります。

つまりここでは、神の国がすぐに現われるという甘い期待を抱いて、多少浮いた気持ちで付いて来る群衆に向かって、すべてを捨てて御心を行なうことだけを志して付いて来るのでなければ、弟子となることは出来ない、と警告しておられるのです。

続けてイエス様は、弟子たちには既に告げておられた(9：23)、自分の十字架を負って従うという弟子となる条件を、群衆にもお示しになりました。弟子となる者は、神様だけを信頼し、御心が行なわれることだけを願って、イエス様がなさるように、自分を捨て自分の十字架を負って御心に従うことが求められるのです。

2. 塔を築く人の譬え (28 - 30)

「塔」の原語は、背の高い建物という意味の言葉で、小は物見のやぐらから、大は壮大な高層建築まで幅広く使われます。ここでは「十分な金があるかどうか、その費用を計算」とありますから、ぶどう畑を見張る塔の下に、ぶどう酒を発酵させるための倉庫が付いている、少し立派な塔のようです。

そのような建物を建てようとする農夫は、「まずすわって 費用を計算」するだろう。さもないと途中で投げ出して物笑いの種になりかねない。こうイエス様は言っておられます。つまり弟子になろうとする者は、すべてを捨ててイエス様に付いて行くことがどういうことであるか、よくよく考えてから付いて来なさい、というのです。

3. 敵と戦う王の譬え (31 - 32)

「敵と戦う王」にしても、「ほかの王と戦いを交えようとするときは」、軽々しくは考えずに「まずすわって、考え」、敵と味方の勢力を比べてみて、勝ち目がないと分かれば、「敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。」そうしなければ、戦いに負けて、すべてを失うことになりかねません。

この譬えでもイエス様は、ご自身に従おうとする人々に、一時の情熱からではなく、これから歩もうとする道について十分に考えた上で、最後まで従う決意をするように求めておられるのです。

4. 二つの譬えの結論 (33)

イエス様は二つの譬えの結論として、また「自分の十字架」の具体的説明として、「自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」とお教えになります。

「捨てる」は、人に対しては「別れを告げる」、物に対しては「放棄する」という意味の言葉です。と言っても、人に別れを告げたら、物を放棄したら弟子となれると言っておられるのではありません。

弟子となる道は、イエス様が十字架上で私たちの罪を贖って下さった救い主であることを信じることから始まります。こうして弟子となった者は、すべてが主のもので、それを主から預かっているということが分かって、自分の心を支配するものがなくなり、すべてを捨て、神様に自分を明け渡して、弟子となる事が出来るのです。

5. 塩の譬え (34 - 35)

イエス様は最後に「塩の譬え」を話されました。ここで「塩」と呼ばれるのは、死海沿岸やシリアの荒野で採れる岩塩です。この岩塩には不純物が多く含まれていたため、湿気を吸って役に立たなくなるが多かったようです。

イエス様の弟子は「地の塩 (マタイ 5:13)」です。一度弟子となりながら、この世の欲を捨て切れなかったり、迫害を受けてたじろいだりする者は、「塩けをなくした」塩同様、何の役にも立たない者として、「外に投げ捨てられ」てしまうのです。

ここでイエス様は、26 - 33節で話された警告に、念を押しておられます。塩けをなくさない方法は、神様に自分を明け渡してイエス様に従うことに徹底することしかありません。付いて来たいと思うならこの覚悟を最後まで持ち続けなくてはならない、という厳しい警告を、イエス様は「聞く耳のある人は聞きなさい。」という強い言葉で結ばれました。

6. 「弟子となる道」と私たち

事前の検討と最後まで成し遂げることの必要を、イエス様は群衆に厳しく求められました。彼らが、信じて与えられる赦しと永遠の命の、恵みの大きさを知らずに付いて来ているからです。

このことは私たちにも求められています。責任や義務感からではなく、イエス様の十字架の血による贖いを信じて与えられた、赦しと永遠の命の恵みの故に、私たちは、すべてを損だと思ふことの出来る者とされているのです (ピリピ 3:8)。

失われた羊と銀貨

- 1 さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。
- 2 すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」
- 3 そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された。
- 4 「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。
- 5 見つけたら、大喜びでその羊をかついで、
- 6 帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。
- 7 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。
- 8 また、女の人が銀貨を十枚持っていて、もしその一枚をなくしたら、あかりをつけ、家を掃いて、見つけるまで念入りに捜さないでしょうか。
- 9 見つけたら、友だちや近所の女たちを呼び集めて、『なくした銀貨を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。
- 10 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」

ルカ15： 1 - 10

(マタイ18：10 - 14参照)

珠玉の譬え、福音書の中の福音書：

ルカ15章の三つの譬えは、珠玉の譬え、福音書の中の福音書、とも呼ばれています。悔い改めの勧めと、神様が、迷い出た罪人を「捜して、見つけて、喜ぶ」方であることが主題だからです。

取税人や罪人たちがイエス様のお話を聞きに来たのを見て、「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」と言って非難するパリサイ人や律法学者たちに、生き方・考え方を变えて、(神に)立ち戻らなければならないと、イエス様が「失われた羊」「失われた銀貨」「失われた息子」の三つの譬えでお教えになったのです。

1. 「取税人、罪人たちがみな(1)」

「取税人」は、ローマ政庁やヘロデ王家から一定地域の徴税権を買い取った「取税人のかしら(19:2)」の下請けをする小役人で、「決められたもの以上(3:13)」を取り立てて、私腹を肥やしたりしたので、ユダヤ人から軽蔑・嫌悪されるだけでなく、法廷で証人に立つ資格など、一切の市民的権利を剥奪されていました。

「罪人」は、高利貸・賭博師・遊女・羊飼いやユダヤ教の道徳を守らないと見られていた人のことで、異邦人と同一視されて、こう呼ばれました。

このような人たちが「みな」つまり大勢でお話を聞こうと集まって来て、その上イエス様は、彼らと食事まで一緒にされるのです。

2. 「パリサイ人、律法学者たちは(2-3)」

自らは言い伝えや律法を厳守している積もりで、守らない人々を軽蔑・嫌悪している「パリサイ人、律法学者たち」から見れば、これは一大事です。

彼らはイエス様を非難して「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」とつぶやきました。取税人や罪人たちと仲間同然に交わるとは何事だ！赦せない！というわけです。その非難にイエス様が、譬え話で応じられたのです。

3. 失われた羊の譬え (4 - 7)

(1) 譬えの内容

羊は迷いやすい動物です。しかも迷ってしまうと自分で羊飼いの所に戻る才覚も、外敵から身を守る力もありません。だから、百匹のうちの一匹をなくした羊飼いは、「九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩」きます。そして「見つけたら、大喜びでその羊をかついで、帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。」

(2) 譬えの意味

見失った羊を「捜して、見つけて、喜ぶ」この譬えを、イエス様は、「それと同じようにひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。」と締めくくられました。

「悔い改める必要のない九十九人の正しい人」とは、今イエス様を非難している「パリサイ人、律法学者たち」のことでしょうか。イエス様はここで彼らに、神様は、迷い出た罪人を捜す真の羊飼いで、罪人の悔い改めを、宴会まで開くほどに大いに喜ぶ方である、とお教えになったのです。

4. 失われた銀貨の譬え (8 - 10)

次は女の人が、なくした一枚の銀貨を「捜して、見つけて、喜ぶ」譬えです。

(1) 譬えの内容

「銀貨」ドラクマはギリシア銀貨のことで、価値はローマ銀貨デナリと同様に、労働者一日分の賃金に相当しました。この女の方はそういう銀貨を十枚持っていて、そのうち一枚を部屋の中でなくしたのです。

当時の家ですから恐らく窓のない、昼でも薄暗い部屋です。彼女は、「あかりをつけ、家を掃いて、見つけるまで念入りに捜」します。そして「見つけたら、友だちや近所の女たちを呼び集めて、『なく

した銀貨を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。」

前の譬えのように、彼女も諦めずに見つけるまで捜します。そして見つけた時の喜びも、一人で祝うような小さなものではなく、周りの人を招いて宴会でも開きそうな、大きなものなのです。

(2) 譬えの意味

イエス様は、この譬えも「それと同じようにひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」と締めくくられました。

なくしたものを「捜して、見つけて、喜ぶ」喜びは、見つけた一匹の羊、一枚の銀貨の価値を喜んでいっているには、喜びようが大き過ぎるようです。イエス様が譬えに込められた喜びは、見つけたものそのものの価値よりも、なくしたものが元の持ち主の所に戻った、という喜びです。

「悔い改める」は、「(神に) 帰る、立ち戻る」という意味もある言葉です。つまりイエス様はここで、なくしたものが戻ったことを喜ぶ、羊飼いや女の人々の喜びに事寄せて、「ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こる」その喜び 神の国全体の喜び を、語っておられるのです。

5. 二つの譬えと私たち

「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます(ヨハネ10:11)。」迷い出た私たちは、イエス様に捜し出され、十字架の死によって罪を贖って頂きました。私たちはその事実を信じて救われましたが、神様はそのことを喜んで下さっておられるのです。

それだけではありません。「いっしょに喜んでください。」は、私たちにも語られています。今度は私たちが、迷い出ている人々を、神様と一緒に「捜して、見つけて、喜ぶ」ように、求められているのです。神様の喜びに与って喜ぶことも、福音の一つの姿なのです。

失われた息子

11 またこう話された。
「ある人に息子がふたりあった。
12 弟が父に、『おとうさん。私に財産の分け前を下さい。』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。
13 それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。
14 何もかも使い果たしたあとで、その国に大きなきんが起こり、彼は食べるにも困り始めた。
15 それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。16 彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。
17 しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。
『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。
18 立って、父のところに行って、こう言おう。
「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。
19 もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。』
20 こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。
21 息子は言った。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』

22 ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。
23 そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。
24 この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』
そして彼らは祝宴を始めた。
25 ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。それで、26 しもべのひとり呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、
27 しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、おとうさんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。』
28 すると、兄はおこって、家にはいろいろともしなかった。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。
29 しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません。30 それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。』
31 父は彼に言った。『おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。
32 だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』」
ルカ15：11 - 32

珠玉の譬えの結び：

珠玉の譬えと呼ばれる、ルカ15章の三つの譬えの中の「失われた羊」「失われた銀貨」という一対の譬えに続いて、「失われた息子」という結びの譬えを学びます。パリサイ人や律法学者たちに、失われたものを「捜して、見つけて、喜ぶ」方である神様に立ち戻れと、イエス様がお教えになったのです。

1. 失われた息子の譬え (11 - 32)

譬えは、放蕩息子である弟の物語 (11 - 24) と、弟を赦せない兄の物語 (25 - 32) に分かれますが、兄も失われた息子だということに、パリサイ人たちに向けた譬えの、中心点があるようです。

(1) 「私に財産の分け前を下さい。(12 - 13)」

この弟息子の要求は、今の時代だけでなく、当時としても不孝極まりない話ですが、父親は許してしまいました。神の審きが、人間を罪の中に放任するという形で行なわれる (ローマ 1:24 - 32) ことを暗示する展開です。「幾日もたたぬうちに」息子は「何もかもまとめて (金に換えて)」、「遠い国に旅立って」、「そこで放蕩して湯水のように財産を使って」しまいました。

(2) 「私は 罪を犯しました。(14 - 19)」

その上飢饉^{ききん}となって、孤立無援の彼は、ユダヤ人にとって汚れの象徴である豚の世話をするしかなくなり、やがて「豚の食べるいなご豆で腹を満たしたい」と思い詰めるまでに落ちぶれました。

そのどん底が彼を目覚めさせ、父の家を思い出させます。彼は決心します。「立って、父のところに行って、こう言おう。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。』」彼は、自分が父の憐れみにすぎるしかないことを悟ったのです。これこそ悔い改めの真の姿です。

(3) 「走り寄って彼を抱き、(20 - 24)」

威厳を尊ぶユダヤの老人は、決して走りません。

しかしイエス様は、この老いた父親を走らせます。

「口づけ」にも、愛情を込めて何度も接吻するという言葉を使っておられます。なくしたものを見つける喜びは、取り乱してしまうほどに大きいのです。父親は、息子と呼ばれる資格はないと自覚している息子に罪の告白を最後まで言わず、息子として迎えて祝宴を始めます。「死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから」です。

(4) 「兄はおこって、(25 - 30)」

それを知った兄息子は父親に怒りをぶつけます。「長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しみと言って、子山羊一匹下さったことはありません。それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。」

「仕え」の原語は奴隷として仕えるという意味の言葉です。父の戒めを守りながらの生活は奴隷奉公だったというのです。いつも父と一緒にいたのに、兄息子の心は、ずっと父から離れていたのです。

(5) 「喜ぶのは当然ではないか。(31 - 32)」

父親は三つの理由を挙げて兄息子をなだめます。

「おまえはいつも私といっしょにいる。」

「私のものは、全部おまえのものだ。」

「弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。」

そして「いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。」と話します。だからお前も一緒に喜んでくれ、というのです。

2. 「失われた息子の譬え」と私たち

結果は記されていませんが、イエス様は兄息子に事寄せて、自分は正しいと思い込んで取税人や罪人をさげすむパリサイ人や律法学者たちが、神様に立ち戻るように、迫っておられるのです。

私たちも問われています。神様の憐れみと喜びを覚えて喜んでいるか、喜んで礼拝を献げているか、人々の救いを神様と共に願い、喜んでいるか。

不正な管理人

1 イエスは、弟子たちにも、こういう話をされた。

「ある金持ちにひとりの管理人がいた。この管理人が主人の財産を乱費している、という訴えが出された。

2 主人は、彼を呼んで言った。『おまえについてこんなことを聞いたが、何ということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。』

3 管理人は心の中で言った。『主人にこの管理の仕事を取り上げられるが、さてどうしよう。土を掘るには力がないし、こじきをするのは恥ずかしいし。』

4 ああ、わかった。こうしよう。こうしておけば、いつ管理の仕事をやめさせられても、人がその家に私を迎えてくれるだろう。』

5 そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に、『私の主人に、いくら借りがありますか。』と言うと、

6 その人は、『油百バテ。』と言った。すると彼は、『さあ、あなたの証文だ。すぐにすわって五十と書きなさい。』と言った。

7 それから、別の人に、『さて、あなたは、いくら借りがありますか。』と言うと、『小麦百コル。』と言った。彼は、『さあ、あなたの証文だ。八十と書きなさい。』と言った。

8 この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。

9 そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らは

あなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。

ルカ16：1-9

10 小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。

11 ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなかったら、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょう。

12 また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょう。

13 しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」 同10-13

特に難解な譬え：

ルカ16章は富に対する正しい態度について、弟子たち(1-13)と、パリサイ人たち(14-31)に、それぞれ語られたものです。

このうち今回学ぶ1-13節は、大きく分けると、不正な管理人の譬え(1-9)と、富に対する教え(10-14)の二つの部分からなっていますが、このうち「不正な管理人」は、イエス様の譬えの中でも特に難解なものとされてきました。解雇を通告された不正な管理人が借金の証文を改竄する、非倫理的な箇所があるからです。

イエス様は、解雇後の自分の生活を確保しようとする、彼の行為そのものを認められたのではなく、「解雇の時」で「死ぬ時」を示され、死後に備えて信仰生活のために富を用いることをお教えになったのです。その点に留意してこの譬えを学びます。

1. 不正な管理人の譬え(1-9)

(1)「会計の報告を出しなさい。(1-2)」

「管理人」は、一家の事務の全権を委ねられた人

のことで、多くは、主人に信頼された奴隷の仕事でした。その管理人が主人の財産を浪費している、と告げ口する者がいたので、「会計の報告を出しなさい。」と主人に申し渡されます。

「会計の報告」は、釈明資料ではなく、解雇後の引き継ぎ資料のことです。彼は解雇を宣告された、つまり管理人の仕事に終わりの時が来たのです。

(2)「管理人は心の中で言った。(3-4)」

事態を深刻に受け止めた管理人は、必死に考えた末に、彼に与えられていた権限を使い切って、自分を将来救ってくれる友を作ることを思い付きます。

(3)「債務者たちをひとりひとり(5-7)」

彼は、債務者呼んで、油百バテを五十バテに、小麦百コルを八十コルに、減らすと申し渡します。減らした油五十バテは約1,650ℓ、小麦二十コルは約7,200ℓで、どちらも500日分の労賃に匹敵する相当な減額です。

もともとイスラエル人同士の間では、利息を取ることが禁じられていました(出エジプト22:25、レビ25:35-36)が、この当時は利息込みで借用額を書いて無利息を装うことが横行していました。

借用額の上積みは、オリーブ油の場合は借りた量の80%の利息と20%の保険を、小麦の場合は20%の利息と5%の保険を加えたそうです。結局管理人は知恵を振り絞って、利息抜きの元金だけの借用額に書き直させたのです。

(4)「抜けめなくやったのをほめた。(8)」

イエス様は「主人は、不正な管理人がこうも抜けめなく(原意:賢く)やったのをほめた。」と言われます。勝手に減額はしましたが、減額を取り消させてことが露見すれば、主人は高利貸しを責められますし、認めた場合でも、貸した元金は戻ります。管理人は知恵を使い切って、解雇後に自分の生活が確保される道を作ったのです。

ここまで来ると「解雇後」が「死後」を意味し、この譬えが、死後に備えて、今、何をなすべきかを教えるものであることが見えてきます。

(5)「自分のために友をつくりなさい。(9)」

イエス様は譬えを「不正の富で、自分のために友をつくりなさい。」と締め括られました。「不正な富」は「この世の富」の慣用句的表現です。

光の子らは、神様から託されている富を神様に喜んで頂けるように用いて生き、永遠の住まいに迎えて頂くのです。「私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。また、人の益を計り、良い行ないに富み、惜しまずに施し、喜んで分け与えるように。また、まことのいのちを得るために、未来に備えて良い基礎を自分自身のために築き上げるように。(テモテ6:17b-19)」

2. 富に対する教え(10-13)

(1)忠実と不忠実(10-12)

「小さい事=不正の富=他人のもの」に忠実な人は「大きい事=まことの富=あなたがたのもの」にも忠実で、前者に不忠実な人は、後者にも不忠実だという教えです。「他人のもの」と呼ばれるこの世の富を御心に従って忠実に用いる弟子でなければ、「あなたがたのもの」、つまり神の国の祝福という賜物を受けられないのです。

(2)「ふたりの主人に仕えることは(13)」

人は二人の主人、神と富との両方に仕えることは出来ません。この世の富に心を奪われ、富を人生の目的とする人は、富の奴隷です。しかし神様を主人とし、富を僕として信仰生活のために用いる人は、正しい道しもべを歩めるように導かれるのです。

イエス様は、弟子は富を御心に従って用いることが出来るように変えられている筈だから、そのように徹底して生きるように、と教えられたのです。

3. 「不正な管理人の譬え」と私たち

この世の富を御心に従って忠実に用いることは、私たちにも求められています。私たちも、神様から託された富を用いて、徹頭徹尾、御心を行なうことに努め、死後に備えて信仰生活を送るのです。

金持ちとラザロ

14 さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。

15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じです。人間の間であがめられる者は、神の前で憎まれ、きらわれます。

16 律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音は宣べ伝えられ、だれもかれも、無理にでも、これにはいろいろとしています。

17 しかし律法の一画が落ちるよりも、天地の滅びるほうがやさしいのです。

18 だれでも妻を離別してほかの女と結婚する者は、姦淫を犯す者であり、また、夫から離別された女と結婚する者も、姦淫を犯す者です。

ルカ16:14 - 18

19 ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。

20 ところが、その門前にラザロという全身おできの貧乏人が寝ていて、

21 金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおできをなめていた。

22 さて、この貧乏人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。

23 その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。

24 彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくて

たまりません。』

25 アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。

26 そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもしかないのです。』

27 彼は言った。『父よ。ではお願いです。ラザロを私の父の家に送ってください。』

28 私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみのある場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』

29 しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者がいます。その言うことを聞くべきです。』

30 彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』

31 アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たいたれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」 同19 - 31

パリサイ人たちへの警告：

イエス様が、人は神と富との両方に仕えることは出来ないと言われると、両立できると主張しているパリサイ人たちはあざ笑いました (16:13 - 14)。

イエス様は、彼らの見せかけの信仰と勝手な律法解釈を厳しく警告された (15 - 18) 上で、死を境に立場が大逆転する「金持ちとラザロ (19 - 31)」の譬えを話されますが、これも、憐れみも悔い改めもない金持ちになぞらえて、パリサイ人たちに警告を与えるものでした。

1. パリサイ人たちへの厳しい警告 (15 - 18)

(1) 「人の前で自分を正しいとする者 (15)」

彼らは人に見せるために神に仕えているが、神様はその心をご存じである、と警告されます。

(2) 「神の国の福音は宣べ伝えられ、(16)」

福音が宣べ伝えられた今、神の国を熱望する者には救いの恵みが与えられるようになったが、信仰が厚いと自己義認している彼らは神の国に入れない、と警告されます。

(3) 「律法の一画が落ちるよりも、(17 - 18)」

律法を勝手に解釈して離婚・再婚を繰り返す彼らは姦淫の罪を犯しているのであって、律法の本質をゆがめてはならない、と警告されます。

2. 金持ちとラザロの譬え (19 - 31)

(1) 「いつも紫の衣や細布を着て、(19)」

「紫の衣」は、地中海のアッキ貝から採れる微量の色素で染めた布で作った衣で、国王や高官が着る非常に高価なものでした。「細布」もエジプト産の亜麻で仕立てた下着で、上流階級の専用品でした。金持ちはこんなものを身につけて、「毎日ぜいたくに遊び暮らして」いました。この金持ちは、「金の好きなパリサイ人たち」を風刺しているのです。

(2) 「ラザロという 貧乏人 (20 - 21)」

イエス様の譬え話に名前付きで登場するのは、彼だけなので、「神は助ける、神に拠り頼む」という意味の「ラザロ」という名前は、注目に値します。

おできを犬になめられ、食卓から落ちる物で腹を満たしたいとまで思う彼が、嘆いたり、恨んだり、呪ったりしていないのも、「神に拠り頼む」という名前にピッタリの気がします。

(3) 対照的な二人の死後 (22 - 23)

ラザロは死んで、貧しかったからではなく、神の助けによって救われ、アブラハムのそばで、永遠の安息に入りました。金持ちも死んで、金持ちだったからではなく、恐らく憐れみも悔い改めもなかったために、ハデス(死の世界)に落とされました。

(4) ハデスに落ちた金持ちの願い (24)

金持ちは、自分がユダヤ人なので、アブラハムを「父」と呼んで、「ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。」と願います。生前ラザロを憐れまなかつたことなぞ忘れて、召使いのように使おうという魂胆です。

(5) アブラハムの答 (25 - 26)

アブラハムの答の一つは、金持ちは富を自分のために使うだけでなく、貧しい隣人のために何かをする責任がある(25)というものです。金持ちは、それを怠って、自分の楽しみだけを追い求めたから罰を受けている、というのです。

もう一つは、神の国とハデスとの間には大きな淵があって、行き来できないというものです。それは人間の力では、もはや取り払えないのです。

(6) へりくだって聖書に聞け (27 - 31)

金持ちは、五人の兄弟が死んでから同じ目に遭わないように、ラザロを遣わして警告して欲しいと願います。アブラハムは、彼らには聖書があるから、その語ることを信じれば分かる筈だ、と答えます。金持ちは、死者が生き返って会ってくれれば、彼らも悔い改めるに違いないと食い下がりますが、アブラハムの答えは「もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。」でした。

3. 「金持ちとラザロの譬え」と私たち

富は信仰深い者に神様から与えられた祝福だ、と「金の好きなパリサイ人たち」は思い込んでいました。そのパリサイ人への警告として、イエス様は、神の国への招きを告げる聖書に、そして又イエス様ご自身の言葉に、へりくだって「耳を傾けないのなら、」神の国への招きに応えられない、と言って、悔い改めを迫っておられます。その警告は、私たちにも向けられています。へりくだって聖書に耳を傾けているか、神様から託された富を用いて、御心を行なうことに、徹頭徹尾、努めているか、と。

役に立たない僕しもべ

- 1 イエスは弟子たちにこう言われた。「つまずきが起こるのは避けられない。だが、つまずきを起こさせる者は、忌まわしいものです。2 この小さい者たちのひとりに、つまずきを与えるようであったら、そんな者は石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。3 気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。4 かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます。』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」
- 5 使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増してください。」6 しかし主は言われた。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ。』と言え、言いつけどおりになるのです。7 ところで、あなたがたのだれかに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野から帰って来たとき、『さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい。』としもべに言うでしょうか。
- 8 かえって、『私の食事の用意をし、帯を締め、私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい。』と言わないでしょうか。
- 9 しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。
- 10 あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい。」

ルカ17： 1 - 10

信仰生活について弟子たちに：

イエス様は今度は弟子たちにお話しになります。弟子たちが、信仰共同体の中で共に生活する際に、お互いにつまずきを起こさせないこと(1-2)、限りなく赦し合うこと(3-4)、からし種ほどの信仰にも、大きな力があること(5-6)、役に立たない僕しもべの譬え(7-10)、がここでは教えられています。

1. 「つまずきを起こさせる者は、(1-2)」

自分の言動を通して、他の人々、特に信仰の弱い人をつまずかせ、神様に背を向けさせるような者は「石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。」これは罰としてではなく、つまずかせるより死んだほうがましだ、と言っておられるのです。

2. 「一日に七度罪を犯しても、(3-4)」

信仰を持っている者は、時として、信仰の仲間を審いてつまずかせることがあります。ここでイエス様は、審くのではなく「戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。」と言っておられます。しかも「あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます。』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」と言われるのです。

「一日に」は毎日と同じですし、七は完全数ですから、「一日に七度」は、限りなく赦せということになります。信仰をもって仲間を戒め、戒められた者が信仰をもって聞くな、悔い改めと赦しが生まれるのです。

3. 「からし種ほどの信仰が(5-6)」

つまずきを与えるな、限りなく赦せ、という教えを聞いて、使徒たちは、これが出来ないのは自分たちの信仰が小さいからだ、と考えたのでしょうか。

「私たちの信仰を増してください。」と、イエス様をお願いしたのでした。

しかしイエス様のお答えは「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ。』と言え、言いつけどおりになるのです。」というものでした。

「もし 信仰があったなら」という言い方ですが、「もし 」を表わすギリシア語には、話し手が、条件を事実として認めて「 だから、 である以上は」と話す場合と、成就するかどうか不確かだとして「仮に なら」と話す場合の二種類があって、ここでは前者の言葉が使われているので、イエス様は、からし種ほどの信仰も無いではないかと責めるのではなく、持っている信仰を生かすように勧めておられる、ということが分かります。

大事なことは、信じているかいらないかで、信仰が大きいか小さいかではない。信じていさえすれば、たとえからし種のように小さい信仰でも、その信仰を用いて神様からの力が働き、何度でも戒め何度でも赦すことが出来る、というのです。

4. 役に立たない僕の譬え (7 - 10)

何度でも戒め、その都度相手が悔い改めたので、何度でも赦したとしても、「あの人立ち直れたのは私のお蔭だ」とでも口走ったら、そのことが知れて、相手や周囲の人がつまずきかねません。そこでイエス様がお話しになったのがこの譬えです。

(1) 「耕作か羊飼いをするしもべ (7 - 9)」

当時の僕は、自由人の身分を持たずに主人に所有される者で、奴隷に近い存在です。主人の要求は、多少にかかわらず果たさなければなりません。でもそれをしたからと言って、主人は彼に感謝しませんし、彼が主人に誇ることも出来ません。

僕が野らから帰って来た時も、主人は、感謝しません。かえって「私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい。」と言いつけます。これは、僕が当然すべきことですから、言いつけ通りにしても、誇るわけには行かないのです。

(2) 「私たちは役に立たないしもべです。 (10)」

「あなたがたもそのとおりです。」イエス様は強い口調で言われます。「自分に言いつけられたことをみな、してしまつたら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい。」

僕は、自分の時間も働きも主人のものであることを知っていますから、仕えた成果を誇りませんし、仕事も一生涯続けます。神の僕である使徒たちも、たとえ御心に従って全力を尽くしていたとしても、その後でなおこのように言えるほどに徹底してへりくだりなさい、と言われるのです。それも努力してへりくだれ、というのではありません。神の僕は、そうへりくだるよう生き方を変えられている、と言っておられるのです。

5. 神の僕

信仰とは、僕として神様に仕えることです。自分の時間も働きも、すべて神様が調べて下さったものと受け止めて、神様に仕えて生きて行くことです。この譬えでイエス様が弟子たちに教えようとしたのは、まさにこのことです。

しかもイエス様は、一日の働きを終えた後で、神様に申し上げるべき言葉まで、教えておられます。「私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。」

6. 「役に立たない僕の譬え」と私たち

「役に立たない」僕とは言っても、何の役にも立たないと、生きている意味がなくなるようなことをイエス様が言っておられるわけではありません。

働きの実りがいかに大きくても、御心を行なったのに過ぎないので、報いて下さいとは祈れません。イエス様の贖いによって生かされ、すべてを調えられて生かされている、と受け止めるように生き方を変えられた者は、御心をしただけです、とへりくだる心を与えられているのです。

仲間を赦さない僕^{しもべ}

- 21 そのとき、ペテロがみもとに来て言った。
「主よ。兄弟が私に対して罪を犯したばあい、
何度まで赦すべきでしょうか。七度まででし
ょうか。」
- 22 イエスは言われた。「七度まで、などとはわ
たしは言いません。七度を七十倍するまでと言
います。」
- 23 このことから、天の御国は、地上の王にたと
えることができます。
王はそのしもべたちと清算をしたいと思った。
24 清算が始まると、まず一万タラントの借りの
あるしもべが、王のところに連れて来られた。
25 しかし、彼は返済することができなかつたの
で、その主人は彼に、自分も妻子も持ち物全
部も売って返済するように命じた。
26 それで、このしもべは、主人の前にひれ伏し
て、『どうかご猶予ください。そうすれば全
部お払いいたします。』と言った。
- 27 しもべの主人は、かわいそうに思って、彼を
赦し、借金を免除してやった。
- 28 ところが、そのしもべは、出て行くと、同じ
しもべ仲間、彼から百デナリの借りのある
者に出会った。彼はその人をつかまえ、首を
絞めて、『借金を返せ。』と言った。
- 29 彼の仲間は、ひれ伏して、『もう少し待って
くれ。そうしたら返すから。』と言って頼ん
だ。
- 30 しかし彼は承知せず、連れて行って、借金を
返すまで牢に投げ入れた。
- 31 彼の仲間たちは事の成り行きを見て、非常に
悲しみ、行って、その一部始終を主人に話し
た。
- 32 そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『悪

いやつだ。おまえがあんなに頼んだからこそ
借金全部を赦してやったのだ。

- 33 私がおまえをあわれんでやったように、おま
えも仲間をあわれんでやるべきではないか。』
- 34 こうして、主人は怒って、借金を全部返すま
で、彼を獄吏に引き渡した。
- 35 あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さな
いなら、天のわたしの父も、あなたがたに、こ
のようになさるのです。」 マタイ18:21-35

デナリとタラント：

デナリはローマ帝国の銀貨で、カイザルの肖像が
刻まれていて、パレスチナでも使われ、ユダヤ人は
このデナリ銀貨を使って、ローマに納税しました。
一デナリは当時の一日分の日当に相当するもので、
ギリシアのドラクマ銀貨はデナリと等価でした。

タラントは、ギリシアの通貨と重量の最大単位と
して使われましたが、重量の場合は約41kgで、通貨
の場合は一タラントの重さの銀の価格、つまり六千
デナリに相当しました。

1. 「七度を七十倍するまで(21-22)」

ペテロが、イエス様に「主よ。兄弟が私に対して
罪を犯したばあい、何度まで赦すべきでしょうか。
七度まででしょうか。」と尋ねました。

ユダヤ教の教えには、三度までは赦せ、四度は赦
すなとあったそうです。その倍も赦せば十分ではな
いかと考えての質問か、あるいは「一日に七度」と
いう教え(ルカ17:4)を思い出しての質問か、と
も考えられます。

お答えは予想外のものでした。「七度まで、など
とはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと
言います。」赦すのは七度までで八度目は赦さなく
てもいいでしょう、と赦す回数を聞いたペテロに、
イエス様は完全数の七を掛け合わせて、回数を数え
て赦すのではなく、限りなく赦し続けなさい、それ
が真の赦しです、とお答えになったのです。

2. 仲間を赦さない僕の譬え (23 - 34)

(1) 「このことから、(23)」

回数を数えて赦すのではなく限りなく赦し続けるのは、とても難しいことです。そこでイエス様は、神の支配は、金を貸していた僕たちと精算をする王に譬えられる、と話し出されました。赦しの出来ない人は神様から赦して頂けない、と譬えでお話しになったのです。

(2) 「一万タラントの借り (24 - 27)」

「まず一万タラントの借りのあるしもべが、王のところに連れて来られた。」一タラントは六千日分の日当に相当しますから、一年に三百日働くとして二十年分の年収ということになります。そうすると一万タラントの借りは年収の二十万年分になりますから、天文学的数字で、とても返せるような金額ではありません。

主人は彼に「自分も妻子も持ち物全部も売って返済するように」命じますが、僕が「主人の前にひれ伏して、『どうかご猶予ください。』」と願うと、「主人は、かわいそうに思って、彼を赦し、借金を免除してやった。」

「ひれ伏して」猶予を願ったからといって赦して貰えるような金額の借金ではありません。謝り方がよくて赦されたのではないのです。僕は、ただ主人の憐れみによって赦されたのです。

(3) 「彼から百デナリの借りのある者 (28 - 30)」

赦された僕は、自力では返せるはずのない莫大な借金を、主人の憐れみによって赦されたことを理解も感謝もしていません。だから出て行って、「同じしもべ仲間で、彼から百デナリの借りのある者に」出会うと、返せる程度の、わずか百デナリを貸した仲間を捕まえて、「首を絞めて、『借金を返せ。』」と言った。」

そして「ひれ伏して」返済の猶予を願う仲間を、「借金を返すまで牢に投げ入れた。」主人から一万タラントもの借金を赦されたのに、わずか百デナリを貸した仲間を赦せなかったのです。

(4) 「悪いやつだ。(31 - 34)」

「彼の仲間たちは事の成り行きを見て、非常に悲しみ、行って、その一部始終を主人に話した。」

主人はそのしもべを呼びつけて、「悪いやつだ。」と言いました。僕が返せもしない借金をしたことを、こう言ったではありません。それは憐れんで赦してやりました。でも自分は主人から憐れんで貰ったのに、仲間を憐れまなかったことは赦せなかったのです。それで「悪いやつだ。」と言って、僕を牢に入れてしまいました。

3. 「心から兄弟を赦さないなら、(35)」

イエス様は、「あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるのです。」と言って、譬えを締めくくられました。一万タラントの借金を超える罪をすべて赦された者は、神様の愛に感謝して、心から兄弟を愛し、心から赦せるはずなのです。

4. 「仲間を赦さない僕の譬え」と私たち

返すに返せないほどの莫大な借金は、神様の御前では、生まれながらの私たちの罪が赦されるはずのないほど大きいものであることを意味しています。それほどに大きい罪を私たちは、イエス様の十字架の贖いによって、ただ神様の憐れみによって赦して頂きました。

問題なのは、私たちが赦しについて考えるとき、自分より悪い相手を、少しはましな自分が赦す、と考えることです。赦す回数を質問したペテロも、そうだったのではないのでしょうか。この譬えでイエス様が教えておられるのは、そのところです。

私たちは、神様の大きな憐れみによって赦されたからこそ、今があります。そのことを出発点として今を生きるなら、罪を贖うためにイエス様を遣わして下さった神様の愛に応えて、私たちは、徹底的に赦し合えるはずなのです。そのことを、イエス様は教えて下さったのです。

祈りについて

- 1 いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。
- 2 「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。
- 3 その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください。』と言っていた。
- 4 彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、
- 5 どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない。』と言った。」
- 6 主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。
- 7 まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけなくて、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。
- 8 あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」 ルカ18：1-8
- 9 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。
- 10 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりにはパリサイ人で、もうひとりには取税人であった。
- 11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、こ

- とにこの取税人のようではないことを、感謝します。
- 12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』
 - 13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』
 - 14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」 同 9 - 14

「神の国はいつ来るのか(ルカ17：20 - 37)」：最後の受難予告(18：31)の、直前のことです。パリサイ人たちが、イエス様に「神の国はいつ来るのか、」と尋ねました。イエス様が来られたことで神の国(神の支配)がすでに始まっていることに、彼らは気付いていないのです(17：20 - 21)。

神の支配は、イエス様に従う者たちの内にすでに始まっていますが、完成して姿を現わすのは終わりの日です。すでに始まった神の支配に気付いている弟子たちにイエス様は、「人の子の日」の審きについて警告された(22 - 37)上で、「不正な裁判官」「自称義人と取税人」という、祈りについての二つの譬えをお話しになりました。

1. 不正な裁判官の譬え(18：1 - 8)

(1) 「いつでも祈るべきであり(1)」

イエス様は、17：20 - 37を踏まえて、この譬えの目的をお示しになりました。迫害と苦難の中にいる弟子たちに、失望せず「人の子の日」の審きを信じて祈り続けるべきことを、お教えになったのです。

(2) 「神を恐れず、人を人とも思わない(2)」

ユダヤの裁判は3人の裁判官で行なわれますが、この譬えでは、一人で裁判していますから、恐らく

ローマ帝国から派遣されてきた裁判官です。彼らは賄賂で動くのを常としていて、「神を恐れず、人を人とも思わない」裁判官でした。

(3)「その町に、ひとりのやもめがいた。(3)」

旧約時代から、やもめは弱者の代表のような存在でした。そのやもめが彼のところに度々やって来て「私の相手をさばいて、私を守ってください。」と訴え続けたのです。

(4)「うるさくてしかたがない。(4-5)」

裁判官の所に通い続けるやもめに、拒否し続ける裁判官。でも裁判官の方が根負けしてしまいます。そして「ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない。」と言って、「裁判をしてやることに」したのです。「ひっきりなしに」には「最後まで」という意味もあって、終末の「さばき(7-8)」の伏線になっています。

「うるさくてしかたがない」の直訳は、「目の下を殴って青あざを作る」です。裁判官が怖がるほどの激しさで、やもめは訴え続けたのです。

(5)「主は言われた。(6-8a)」

2-5節の譬えの中心は、やもめの熱心さにありましたが、ここでイエス様は、不正な裁判官でさえやもめの願いを聞いたのだから、「まして神は」、願いを聞き入れないはずがないではないか、と中心をお移しになったのです。「あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。」祈り続ける神の民のために、正しい審きをされずに放っておかれることなどあるはずがない、と言われるのです。

(6)「人の子が来たとき、はたして(8b)」

「人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」イエス様は、再び来られた時、信じて祈り続ける信仰を地上に見出せるだろうか、と問われます。疑っておられるのではありません。「ひとりもとは(主の許に)取られ、他のひとりもとは残されます。(17:34,35)」弟子たちが取り残される者とならないように、警告しておられるのです。

2. 自称義人と取税人の譬え(9-14)

(1)「自分を義人だと自任し、(9)」

イエス様は、神様に「義と認められ(14)」するのは、自称義人ではなく、自らを罪人と告白する者であると、この譬えで警告しておられます。

(2)「心の中でこんな祈りをした。(11-12)」

「自分を義人だと自任し」ているパリサイ人は、神様に祈るのではなく、独り言を言っています。(「心の中で」の直訳は「自分に向かって」)

「私は ではない、 している」と、一人称単数形の動詞を連発して、自分を誇っています。憐れみを乞うべき罪など、全く感じていません。

(3)「こんな罪人の私をあわれんで(13)」

取税人は、他国のために自国の人々から徴税する裏切り者で、私腹を肥やす罪人でしたが、彼は、ひたすら神様に祈っています。

罪人である自分に絶望し、告白しています。

神様の憐れみだけを求めています。

(4)「自分を低くする者は高くされる(14)」

憐れみを求める必要を感じないパリサイ人ではなく、憐れみにすぎるしかなかった取税人が、神様の憐れみによって受け入れられ、神様に「義と認められて家に帰りました。」

3. 二つの譬えと私たち

つらいことや苦しいことが続いて耐えられそうもなくなると、祈っても無駄だ、とあきらめたくなることがあります。そのような時でも神様を信頼して祈り続けるようにと、イエス様は「不正な裁判官」で、強く私たちに迫っておられます。

「自称義人と取税人」では、御前でへりくだり、自分によってではなく神様によって義とされるように、私たちに勧めておられます。この譬えの直後にイエス様は、神の国は幼子のような者たちの国、と言われました(ルカ18:16)。幼子やこの取税人のように、ただ神様の憐れみにすぎる心を、私たちに求めておられるのです。

ぶどう園の労務者

- 1 天の御国は、自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人のようなものです。
- 2 彼は、労務者たちと一日一デナリの約束ができると、彼らをぶどう園にやった。
- 3 それから、九時ごろに出かけてみると、別の人たちが市場に立っており、何もしないでいた。
- 4 そこで、彼はその人たちに言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。』
- 5 彼らは出て行った。それからまた、十二時ごろと三時ごろに出かけて行って、同じようにした。
- 6 また、五時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。『なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか。』
- 7 彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』彼は言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。』
- 8 こうして、夕方になったので、ぶどう園の主人は、監督に言った。『労務者たちを呼んで、最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちにまで、賃金を払ってやりなさい。』
- 9 そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつもらった。
- 10 最初の者たちがもらいに来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らもやはりひとり一デナリずつであった。
- 11 そこで、彼らはそれを受け取ると、主人に文句をつけて、
- 12 言った。『この最後の連中は一時間しか働かなかったのに、あなたは私たちと同じにしました。私たちは一日中、労苦と焼けるような

暑さを辛抱したのです。』

- 13 しかし、彼はそのひとりに答えて言った。
『私はあなたに何も不当なことはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。』
- 14 自分の分を取って帰りなさい。ただ私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいのです。
- 15 自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法がありますか。それとも、私が気前がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか。』
- 16 このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」 マタイ20： 1 - 16

この譬えが語られた背景：

この譬えが語られたのは、エルサレムに上るためイエス様が、ヨルダン川東側のペレヤ地方を通っておられるときでした(19： 1、20： 17)。三度目の受難予告(20： 17 - 19)の直前のことです。

金持ちが神の国に入ることの難しさをイエス様が指摘されたのを聞いたペテロが、すべてを捨てて従った自分たちにはどんな報いがあるのか、と尋ねました(19： 27)。この時イエス様は「ただ、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。」と警告されました(同30)。

続けてイエス様は、訳出されていませんが「なぜなら」という接続詞で始まる「ぶどう園の労務者」の譬えをお話しになり、最後に同じ警告を繰り返して、譬えを結ばれました。つまりこれは、19： 30の警告を説明する譬えなのです。

1. ぶどう園の労務者の譬え (20： 1 - 16)

(1) 「天の御国は、(1)」

「神の支配で起こることは、自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人で起こることと同じです。」という譬えです。

日雇い労働者が仕事を求めて集まる「市場」に、朝早く、労働者を雇いに、主人が出かけます。

(2)「一日一デナリの約束ができると、(2)」

一デナリは、当時の一日分の賃金に相当する金額で、普通の家庭の一日分の生活費でもありました。当時は朝六時から十二時間労働でしたから、主人は、朝早く出かけて「一日一デナリの約束ができると、彼らをぶどう園にやった」のです。

(3)「相当のものを上げるから。(3-7)」

早朝に一日一デナリの約束で労働者を雇うまではよくある話でしたが、主人は、九時ごろにも市場に行き、あづれている人を見つけて、「相当のものを上げるから。」といって雇います。十二時ごろと三時ごろにも、「行って、同じように」しました。それだけではありません。終業一時間前の五時ごろにも市場に行き、あづれている人たちを見付けると、賃金の約束はせずに、雇い入れます。

(4)「最後に来た者たちから順に(8)」

日雇いの賃金は、その日のうちに支払わなければなりません(レビ19:13)。主人は、「最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちにまで、賃金を払ってやりなさい。」と監督に言い付けます。

(5)「私たちは一日中 辛抱した(9-12)」

五時ごろに雇われた人たちが、まず一デナリずつ貰いました。早くから働いていた人たちは、それを見て、自分たちは一デナリ以上貰えるに違いない、と期待したようです。でも約束の一デナリしか貰えなかったのに、「この最後の連中は一時間しか働かなかったのに、あなたは私たちと同じにしました。私たちは一日中、労苦と焼けるような暑さを辛抱したのです。」と不平を鳴らします。

丸一日働いた自分たちが一時間しか働かなかった者と同じ賃金というのは不公平だ、というのです。

(6)「不当なことはしていない。(13)」

働いた時間に応じて賃金を払うのが公平だと抗議する、丸一日働いた者の言い分に、主人は、約束通り払ったのだから「あなたに何も不当なことはして

いない。」と突っ撥ねます。

(7)「あなたと同じだけ上げたいのです。(14)」

続けて「私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいので」あって、この者に幾ら払うかは主人の裁量によることだ、と話します。

(8)「それとも、私が気前がいいので、(15)」

最後に主人は「それとも、私が気前がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか。」と反問しますが、「気前がいい」の原語は、金持ちの青年とイエス様との対話の中に、「どんな良いことを」「良いことについて」「良い方は」と三回も出てくる、「良い」と同じ言葉です(19:16-17)。また「ねたましく」の原意は「邪悪な」です。

イエス様は、「わたしは最後の人にも恵みと憐れみを与えるが、わたしが善であることが、あなたの目には邪悪と映るのか。」と、主人の口を借りて、話しておられるのです。

(9)「このように、あとの者が先になり、(16)」

この譬えは、「何もかも捨てて」従った「私たちが何がいただけるでしょうか。」という、ペテロの問いをきっかけに、最初から従ってきたのだからという、思い上がりを戒めようとして、神の国の報酬が当然の報いとしてではなく恵みとして与えられるものであることを、弟子たちにお教えになったものです。それで「あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」と言われたのです。

2. 「ぶどう園の労働者の譬え」と私たち

働きに見合った報酬を得られる時、私たちは公平だと考えます。でも神様の御前ではそうではない、とイエス様は警告しておられます。

神様がこの世の公平さで御国に入る者をお選びになるとすると、ゼロ同然の働きしか出来ない私たちは、御国に入れて頂くことが出来ません。この世の公平さによらずに、神様の憐れみに気づいて感謝する人だけが御国に招かれる、とイエス様は私たちに明確に示しておられるのです。

二人の息子

23 それから、イエスが宮には行って、教えておられると、祭司長、民の長老たちが、みもとに来て言った。「何の権威によって、これらのことをしておられるのですか。だれが、あなたにその権威を授けたのですか。」

24 イエスは答えて、こう言われた。「わたしも一言あなたがたに尋ねましょう。もし、あなたがたが答えるなら、わたしも何の権威によって、これらのことをしているかを話しましょう。

25 ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか。天からですか。それとも人からですか。」すると、彼らはこう言いながら、互いに論じ合った。「もし、天から、と言え、それならなぜ、彼を信じなかったか、と言うだろう。

26 しかし、もし、人から、と言え、群衆がこわい。彼らはみな、ヨハネを預言者と認めているのだから。」

27 そこで、彼らはイエスに答えて、「わかりません。」と言った。イエスもまた彼らにこう言われた。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに話すまい。

マタイ21：23 - 27

28 ところで、あなたがたは、どう思いますか。ある人にふたりの息子がいた。その人は兄のところに来て、『きょう、ぶどう園に行っておいでしてくれ。』と言った。

29 兄は答えて『行きます。おとうさん。』と言ったが、行かなかった。

30 それから、弟のところに来て、同じように言った。ところが、弟は答えて『行きたくありません。』と言ったが、あとから悪かったと思って出かけて行った。

31 ふたりのうちどちらが、父の願ったとおりに

したのでしょう。」彼らは言った。「あとの者です。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。取税人や遊女たちのほうが、あなたがたより先に神の国にはいるのです。

32 というのは、あなたがたは、ヨハネが義の道を持って来たのに、彼を信じなかった。しかし、取税人や遊女たちは彼を信じたからです。しかもあなたがたは、それを見ながら、あとになって悔いることもせず、彼を信じなかったのです。

同28 - 32

この譬えが語られた背景：

受難週の第三日。イエス様を取り巻く緊張が相当高まる中で、祭司長や民の長老たちが、何の権威によって宮から商売人を追い出したり、宮で教えたりしているかとイエス様を詰問しました。自分たちはそんなことを許可していないぞ、というわけです。

イエス様は直接お答えにはならず、「ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか。」と反問されました。祭司長たちは、「もし、天から、と言え、それならなぜ、彼を信じなかったか、と言うだろう。しかし、もし、人から、と言え、群衆がこわい。彼らはみな、ヨハネを預言者と認めているのだから。」と論じ合った末に「わかりません。」と答えました。

イエス様も、「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに話すまい。」と言って、彼らへの答えを拒否されました。その上でイエス様は「二人の息子」「悪い農夫たち」「結婚の披露宴」の三つの譬えをお話しになりました。

今回学ぶ「二人の息子」で、イエス様は、祭司長や民の長老たちユダヤ教指導者の頑迷さを責めて、悔い改めを求めておられますが、「ぶどう園の労務者(20：1-16)」で学んだ、「あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」という教えがこの譬えでも原則となっています。

1. 二人の息子の譬え (28 - 32)

(1) 「あなたがたは、どう思いますか。(28)」

21章の二つの譬えはどちらもぶどう園の話です。ぶどう園は神の民イスラエルを暗示します。そしてぶどう園の主人であり父であるお方は、神様です。「きょう、ぶどう園に行っておいでしてくれ。」と父に命じられた、二人の息子の異なった対応を通して、聞き手の生き方が問われています。

(2) 「行きます。おとうさん。(29)」

兄息子は「行きます。おとうさん(直訳：主よ、私か)。」と言ったのに、行きませんでした。

「主よ、私が(参ります)。」と言ったのに行かなかった兄息子は、自らは御心に従っていると自認しながら、実は御心に背いている、ユダヤ教指導者たちを指しているのです。

(3) 「あとから悪かったと思って(30)」

兄と違い弟は、一度は「行きたくありません。」と断りましたが、「あとから悪かったと思って出かけて」行きました。一度断ったけれども心を変えて出かけて行った弟は、初めは御心に背いていたけれども、ヨハネの言葉を聞き、悔い改めてイエス様に従った、取税人や遊女たちを指しています。

(4) 「どちらが、父の願ったとおりに(31)」

イエス様は、お話を聞いているユダヤ教指導者たちに「ふたりのうちどちらが、父の願ったとおりにしたのでしょうか。」とお聞きになりました。彼らは「あとの者です。」と答えます。

すかさずイエス様は、譬えの意味を話されます。

「まことにあなたがたに告げます。取税人や遊女たちのほうが、あなたがたより先に神の国にはいるのです。」イエス様が来られて到来した神の国に、さげすまれている取税人や遊女たちが、あなたがたより先に招き入れられている、ということです。

「あなたがたより先に神の国にはいる。」という御言葉の蔭には、御前で面従腹背を続けているユダヤ教指導者たちにも悔い改めの機会が残されていることが暗示されています。

(5) 「取税人や遊女たちは彼を信じた(32)」

続けて、その理由も話されます。「というのは、あなたがたは、ヨハネが義の道を持って来たのに、彼を信じなかった。しかし、取税人や遊女たちは彼を信じたからです。しかもあなたがたは、それを見ながら、あとになって悔いることもせず、彼を信じなかったのです。」

彼らが本当に御心に従っていたなら、バプテスマのヨハネが来て悔い改めるようにと説いたときに、それを受け入れたでしょうし、イエス様の御言葉にも聞き従った筈です。それなのに彼らは、取税人や遊女たちが悔い改めて神様に立ち返るのを見ても、ヨハネの教えを受け入れられず、御言葉にも聞き従えなかったのです。

2. この譬えの中心点

この譬えでイエス様が教えておられる中心点は、心を変えて御心に従う、ということです。弟息子は「『行きたくありません。』と言ったが、あとから悪かったと思って出かけて」行きました。彼は心を変えて御心に従い、「父の願ったとおりにした」のです。

一方ユダヤ教指導者たちは、取税人や遊女たちが心を変えて御心に従ったのに、「それを見ながら、あとになって悔いることもせず、彼を信じなかったのです。」

3. 「二人の息子の譬え」と私たち

「どちらが、父の願ったとおりにした」かという問い掛けは、私たちにも向けられ、悔い改めて御心に従うことの大切さを教えています。私たちは信仰によって救われると信じて、信仰告白をしますが、御前に入る時「救われた者として相応しい悔い改めと御心に従った生活をしたか」と問われることを覚えながら生きるのです。「また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。(ヤコブ 1:22)」

(2) 「しもべたちを遣わした。(34)」

「収穫の 때가 近づいたので、」主人は、それまでの投資の分け前として、収穫の一部を受け取るために、僕たちを遣わしました。

(3) 「そのしもべたちをつかまえて、(35 - 36)」

ところが農夫たちは、主人の取り分を渡すどころか、「農夫たちは、そのしもべたちをつかまえて、ひとりは袋だたきにし、もうひとりは殺し、もうひとりは石で打った。そこでもう一度、前よりもっと多くの別のしもべたちを遣わしたが、やはり同じような扱いをした。」

(4) 「息子を遣わした。(37 - 39)」

そこで主人は、「私の息子なら、敬ってくれるだろう。」と言って、息子を遣わしました。

ところが農夫たちは、息子を見て主人が死んだと勘違いしたのでしょうか。「『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺して、あれのものになるはずの財産を手に入れようではないか。』そして彼をつかまえて、ぶどう園の外に追い出して殺してしまった。」

(5) 「ぶどう園の主人が帰って来たら(40 - 41)」

「二人の息子の警え」でもそうでした(31)が、この警えでもイエス様は、「このばあい、ぶどう園の主人が帰って来たらその農夫たちをどうするでしょう。」と言って、聞き手であるユダヤ教指導者たち自身に、結論を言わせようとされます。

彼らは、「その悪党どもを情け容赦なく殺して、そのぶどう園を、季節にはきちんと収穫を納める別の農夫たちに貸すに違いありません。」と答えざるを得ませんでした。

(6) 「家を建てる者たちの見捨てた石。(42)」

そこでイエス様は詩篇 118 : 22 - 23 を引用されま
す。「見捨てる」の原意は「審いて捨てる」です。「礎の石」は「隅の首石^{おやいし}」で、石造りの建物の隅に据えられる、一番大切な土台を言います。

イエス様は、彼らが審いて処刑しようとしているイエス様が霊のイスラエルの土台となる、と聖書に書いてある、と言われたのです。

(7) 警えの結論(43 - 44)

そしてこの詩篇の句からイエス様は、「神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。また、この石の上に落ちる者は、粉々に碎かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛ばしてしまいます。」と警えの結論を導き出されます。神の国は、肉のイスラエルから取り去られて、ユダヤ人と異邦人の区別なく、霊のイスラエルに与えられるというのです。

しかもイエス様の石は、土台ともなるし審きの石ともなって、イエス様を拒み敵対する者は木端微塵^{こっばみじん}にされると警告されたのです。

(8) 「祭司長たちとパリサイ人たちは(45 - 46)」

ユダヤ教指導者たちは、イエス様が、警えで自分たちの罪を指摘されたことにやっと気付きました。これだけはっきり警告されても彼らは、悔い改めるどころか、かえってイエス様を捕えようとします。しかし、イエス様を預言者と認める群衆を恐れて、果たせませんでした。

2. この警えの中心点

イエス様はこの警えで、ご自身が、権威そのものであるということと、ユダヤ教指導者たちによって捨てられるけれども、審き主であり、霊のイスラエルの土台になるということ、を、教えておられます。神様のご計画は、選ばれた者が不従順で拒み続けても、中断されるものではなく、「神の国の実を結ぶ国民」を選んで、成し遂げられるのです。

3. 「悪い農夫たちの警え」と私たち

神様はご計画を成し遂げるために選ばれた人々の反抗、不誠実、不信仰が続いても、忍耐深いお方で憐れんで下さいます。しかしそれは、いつまでも続くものではなく、審きの時までのことでもあります。そのためこの警えは、「神の国の実を結ぶ」ことがいかに大切であるかを、霊のイスラエルとしての私たちに教えているのです。

結婚の披露宴

- 1 イエスはもう一度たとえをもって彼らに話された。
- 2 「天の御国は、王子のために結婚の披露宴を設けた王にたとえることができます。
- 3 王は、招待しておいたお客を呼びに、しもべたちを遣わしたが、彼らは来たがらなかった。
- 4 それで、もう一度、次のように言いつけて、別のしもべたちを遣わした。『お客に招いておいた人たちにこう言いなさい。「さあ、食事の用意ができました。雄牛も太った家畜もほふって、何もかも整いました。どうぞ宴会にお出かけください。」』
- 5 ところが、彼らは気にもかけず、ある者は畑に、別の者は商売に出て行き、
- 6 そのほかの者たちは、王のしもべたちをつかまえて恥をかかせ、そして殺してしまった。
- 7 王は怒って、兵隊を出して、その人殺しどもを滅ぼし、彼らの町を焼き払った。
- 8 そのとき、王はしもべたちに言った。『宴会の用意はできているが、招待しておいた人たちは、それにふさわしくなかった。
- 9 だから、大通りに行って、出会った者をみな宴会に招きなさい。』
- 10 それで、しもべたちは、通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った者をみな集めたので、宴会場は客でいっぱいになった。
- 11 ところで、王が客を見ようとしては行って来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない者がひとりいた。
- 12 そこで、王は言った。『あなたは、どうして礼服を着ないで、ここには行って来たのですか。』しかし、彼は黙っていた。
- 13 そこで、王はしもべたちに、『あれの手足を

縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ざしりするのだ。』と言った。

- 14 招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。」
- マタイ22：1-14

この譬えの背景：

受難週の第三日。祭司長やパリサイ人たちの詰問に、イエス様は、「二人の息子」「悪い農夫たち」「結婚の披露宴」と三つの譬えで答えられました。

「結婚の披露宴」は、「もう一度 話された」で始まることと、客が結婚披露宴への三度目の招待を反抗的に断り使者を殺してしまう内容が、「悪い農夫たち」で農夫たちが主人に収穫を分けず、主人の僕や息子^{しもべ}を殺してしまうのと似ているので、この二つは並行した譬えと考えてよいでしょう。

つまり「結婚の披露宴」は「神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。(21:43)」という「悪い農夫たち」の結論の、言わば説明として、イエス様が、祭司長やパリサイ人たちに話された譬えなのです。

1. 王の招き (1-4)

- (1) 「天の御国は、(1)」

この譬えは、天の御国 (= 神の支配) で起こることは、「王子のために結婚の披露宴を設けた王」で起こることと同じです、という譬えです。

- (2) 「それで、もう一度、(2-4)」

当時の習慣では、宴会の準備が整うと、前もって招待しておいた客に、二度目の招待をしましたが、この譬えでは、招待をしておいた客に二度目の招待をしたのに、彼らが来たがらなかった(3)ので、三度目の招待がされたのです。三度もということに神様の忍耐と憐れみの深さが暗示されています。

2. 招かれた者の背きと審き (5-7)

- (1) 「そして殺してしまった。(5-6)」

しかし招待の大切さを悟らない彼らは、三度目の

招待も無視して「一人は自分の畑に、一人は自分の商売に、出て行き（直訳）」ました。それどころか「そのほかの者たちは、王のしもべたちをつかまえて恥をかかせ、そして殺してしまった」のです。

(2)「その人殺しどもを滅ぼし、(7)」

「王は怒って、兵隊を出して、その人殺しどもを滅ぼし、彼らの町を焼き払った。」王は、その軍隊によって、王の僕を殺した人々を殺すだけでなく、彼らの町を焼き払った、というのです。

この異常な展開によって、メシヤを信じて救われるように神様に招かれたのに、かえって預言者を迫害しメシヤを殺してしまうユダヤ人に対する審きが暗示されています。このようにお話しになることでイエス様は、ユダヤ人が救いの招きに背き続けて来たことを指摘して、ユダヤ教指導者たちを非難されたのです。

3. 異邦人や罪人への招き(8-10)

(1)「出会った者をみな宴会に(8-9)」

「そのとき、王はしもべたちに言った。『宴会の用意はできているが、招待しておいた人たちは、それにふさわしくなかった。だから、大通りに行って、出会った者をみな宴会に招きなさい。』」

「大通り」の原意は、町から田舎へ通じる道路の出口です。招待客が「ふさわしくなかった」から、そこに行って、今まで王の招待に関係なかった人々を招きなさい、というのです。この新しい招きは、ユダヤ人が救いの招きに応じなかったので、招きが異邦人や罪人にも及ぶことを暗示しています。

(2)「出会った者をみな集めたので、(10)」

「それで、しもべたちは、通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った者をみな集めたので、宴会場は客でいっぱいになった。」

新しい招きは、「悪い人でもよい人でも(原文の順序)」「出会った者」「みな」に臨みます。救いの招きは、異邦人とユダヤ人、道徳的に「悪い人」と「よい人」、の別を問わないのです。

4.「どうして礼服を着ないで、(11-13)」

旧約聖書では、礼服は神様から与えられる恵みの晴れ着(イザヤ61:10)であり、義の象徴でした。ユダヤには、婚礼の招待客に礼服を提供する習慣もあり、客はこれを着て自分の喜びを表わしました。

大通りで集められた人も、提供された礼服を着て列席したようです。ところが、礼服を着ないで列席するのは失礼な筈なのに、王が「はいつて来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない者がひとりいた。そこで、王は言った。『あなたは、どうして礼服を着ないで、ここにはいつて来たのですか。』」

彼は着る必要も答える必要もないと思ったのか、黙っていましたが、「王はしもべたちに、『あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ざしりするのだ。』」と言った。」

この礼服は、信仰によって与えられるキリストの義の衣(イザヤ61:10、ガラテヤ3:27参照)を暗示しています。自己義認からこれを拒む者には「外の暗やみ」の審きが待っているのです。

5. 譬えの結論(14)

「招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。」救いの招きは、豊かに提供されています。でも折角の招きを無視したり(3-5)、背いたり(6)、自分の着ている物に執着して、キリストの義の衣を拒む(11-13)など、^{あずか}選びに与れない者が多くいて、「選ばれる者は少ないのです。」

それで「外の暗やみに放り出」されかねないと、祭司長やパリサイ人たちに警告されたのです。

6.「結婚の披露宴の譬え」と私たち

自分の着ている物がどんなによくても、王から与えられる礼服以外は、披露宴で認められません。私たちにとっての礼服は、イエス様の十字架の贖いによる「救いの衣(イザヤ61:10)」です。神様の御前でへりくだる人だけが、その衣を着ることを赦され、感謝しつつ、喜びの宴に連なれるのです。

その時について

- 32 いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。
- 33 そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。
- 34 まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。
- 35 この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。
マタイ24：32 - 35
(マルコ13：28 - 31、ルカ21：29 - 33参照)
- 36 ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。
- 37 人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。
- 38 洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。
- 39 そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。
- 40 そのとき、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。
- 41 ふたりの女が臼をひいていると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。
- 42 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。
- 43 しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知ってい

たら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう。

- 44 だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。 同36 - 44

(マルコ13：32 - 37、ルカ12：35 - 40

” 17：26 - 35参照)

受難週第三日までのイエス様：

第一日、エルサレム入城(マタイ21：1 - 11)。第二日、宮をきよめられ(12 - 17)、いちじくの木を枯らされました(18 - 22)。第三日、宮で教えておられると、ユダヤ教指導者たちから「何の権威によって、」と詰問され(23 - 27)、「二人の息子」「悪い農夫たち」「結婚の披露宴」の三つの譬えでお答えになりました(21：28 - 22：14)。

守勢に立たされたユダヤ教指導者たちは、納税・復活・律法の問題で、イエス様に論争を挑みましたが、論破されてしまいました(22：15 - 46)。

この論争の後でイエス様は、パリサイ主義に対する激しい非難を、群衆と弟子たちにお話しになりました(23章)。

次いで弟子たちに、神殿の崩壊、終末の前兆、主の再臨(24：1 - 31)、前兆により終末の近いことを知り、油断しないで再臨を待ち望むべきことを教える二つの譬え(32 - 44)、忠実に思慮深く働いてその時を待つべきことを教える三つの譬え(24：45 - 25：30)を話され、最後に終末の審判と愛の奉仕の大切さ(31 - 46)、をお教えになったのです。

1. 二つの譬えに先立って(24：1 - 31)

壮大な神殿に驚く弟子たちに、その崩壊を預言された(1 - 2)イエス様は、彼らの質問に答えて、終末の前兆について話され(3 - 14)てから、前兆への注意を与えられ(15 - 28)、さらに主の再臨についてお教えになりました(29 - 31)。

2. いちじくの木の警え (32 - 35)

(1) 「夏の近いことがわかります。(32 - 33)」

パレスチナでは、いちじくの木は他の落葉樹より遅れて新緑の芽を出します。それでいちじくの「枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。」自然の変化を通して季節の移り変わりが分かるように、偽キリスト、偽預言者、苦難などの前兆 (5 - 28) によって、終末が来ることもはっきりと分かるのです。

(2) 「これらのことが全部起こって (34 - 35)」

「これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。」イエス様は、今の時代が過ぎ去るよりもこれらの終末の前兆 (5 - 28) が全部起こる方が容易であると言って、35節の「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」と共に、終末預言が必ず成就することを強調しておられます。

イエス様は、必ず来る終末を迎える者として生きるべきことを、私たちに迫っておられるのです。

3. 目を覚ましている僕しもべの警え (36 - 44)

(1) 「ただ父だけが知っておられます。(36)」

終末の前兆となる出来事が分かったとしても、その時が確実に分かるわけではありません。イエス様は使徒 1: 7で、弟子たちに「いつか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。」と教えておられますが、ここでも、だからその時がいつ来てもよいように備えておく必要がある、と強調しておられるのです。

(2) 「彼らはわからなかったのです。(37 - 39)」

「人の子は、思いがけない時に来る (44)」ことを、ノアの洪水を例に引いて強調しておられます。ノアが「義を宣べ伝えた (ペテロ 2: 5)」のに人々は、「飲んだり、食べたり、めとったり、とついでにいました。そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。」

(3) 「ひとりを取られ、ひとは (40 - 41)」

「思いがけない時に来る」ので、畑にいる二人の男 (原文) や臼で粉をひいている二人の女たちにしても、備えの出来ている一人は御国に引き取られ、出来ていない一人は見捨てられて残される、ということが起こるのです。

(4) 「だから、目をさましていなさい。(42)」

そこでイエス様は私たちに「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。」とお教えになります。私たちは「自分の主がいつ来られるか、知らない」のですが、必ず来ることを覚えて、自分自身の生活を点検して、終末を待ち望む者にふさわしい生活をするように変わることが求められているのです。

(5) 「夜の何時に来ると知っていたら (43 - 44)」

イエス様はさらに泥棒に警えて話されます。泥棒の来る時が前もって分かっていたら、押し入れられないように備える筈です。目を覚ましていないから、泥棒が土壁に穴をあけて押し入る (原文) のです。

泥棒が来るか来ないかは分かりませんが、終末は必ず来ます。しかし、その日が来るのを待ち望む者は、イエス様が「思いがけない時に」来られても、あわてることはないのです。「だから、あなたがたも用心していなさい。(44)」

4. 二つの警えと私たち

イエス様は二つの警えで私たちに、必ず来る終末を迎える者として日々をどのように生きるべきか、と問われ、生き方の変化を求めておられます。

「あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。(ローマ13: 11 - 12)」

忠実な僕しもべと悪い僕しもべ

- 45 主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な思慮深いしもべとは、いったいどれでしょうか。
- 46 主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。
- 47 まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。
- 48 ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい。』と心の中で思い、
- 49 その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、
- 50 そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。
- 51 そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ざしりするのです。

マタイ24：45 - 51

(ルカ12：41 - 48参照)

終末を忠実に思慮深く待つための三つの譬え：

「いちじくの木」「目を覚ましている僕しもべ」という再臨を待ち望むための二つの譬え(24：32 - 44)に続けてイエス様は、忠実に思慮深く働いてその時を待つための三つの譬え(24：45 - 25：30)を、弟子たちにお話しになりました。

イエス様はまず「忠実な僕しもべと悪い僕しもべ」で、「忠実な思慮深いしもべ」としてどのように目を覚ましているべきかをお教えになった上で、「十人の娘」でその「思慮深い」面を、「タラント」でその「忠実な」面を、詳しく説明して下さったのです。

ルカ12章では、再臨についての譬え(39 - 40)を聞いたペテロの「主よ。このたとえは私たちのために話して下さるのですか。それともみなのためなのですか。」という質問に、直接はお答えにならない

いで、イエス様は、「忠実な僕しもべと悪い僕しもべ」の譬えを話しておられますが、いずれの場合も、譬えの中の「その家のしもべたちを任されて、食事時には」彼らに食事をきちんと与える僕しもべは、主人の心を知っている、弟子たち指導者を暗示しておられるのです。

ところで、再臨を待ち望む二つの譬えで、イエス様は、再臨に備えて「目をさまさない。」とお勧めになりましたが、この譬えに登場する「忠実な思慮深い僕しもべ」と「悪い僕しもべ」を通して、私たちは、目を覚ましていることを一歩踏み込んだ内容で学ぶことが出来ます。つまり三つの譬えは、二つの譬えからさらに一歩踏み込んだ内容の譬えなのです。

1. 忠実な僕しもべと悪い僕しもべの譬え(24：45 - 51)

(1) 「忠実な思慮深いしもべとは、(45)」

大きな家で僕が沢山います。譬えの僕しもべは、主人から「その家のしもべたちを任されて」います。彼は「食事時には彼らに食事をきちんと与える」など、任されたことに対して「忠実な思慮深いしもべ」であることが求められています。

「忠実な」の原語ピストスは、新約聖書に67回も出て来ます。「信仰」(ピスティス)と同じ語源の言葉で、(主人の言葉を)信じている、(だから主人を)信頼している、という意味の忠実さです。つまり忠実な僕しもべは、主人の言葉に全く信頼して、任されたことを心から行なうのです。

「思慮深い」(フロニモス)は、フロネオー(思う、考える、判断する)から出た言葉で、主人から任されている仕事がどんなものかをよく理解した上での賢さ、思慮深さを意味します。

つまり「忠実な思慮深い」僕しもべは、主人をよく知り、信頼し、何事も主人のためにしている僕しもべなのです。

(2) 「主人が帰って来たときに、(46)」

任されたことを仕遂げ、主人がいつ帰って来ても大丈夫という状態になっている僕しもべこそ、真に目を覚ましている僕しもべで、「主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。」

(3) 「彼に自分の全財産を任せるように (47) 」

このような「忠実な思慮深いしもべ」に、主人は「自分の全財産を任せるようになります。」たとい主人の帰りが遅れても、任されていることを忠実に思慮深く仕遂げる僕の受ける恵みは大きいのです。

「自分の全財産を任せる」とは、神様に信頼された者として永遠に生きることを暗示します。

(4) 「主人はまだまだ帰るまい。(48) 」

「忠実な思慮深いしもべ」と違って主人の帰りを待つ心がないので、「主人はまだまだ帰るまい。」と心の中で思っている、「悪いしもべ」がいます。彼は主人の心を知らず、主人から任されているのにその信頼に応えず、主人のためにではなく、自分のために生きている僕です。主人の帰りが主の再臨を暗示していることが、見えてきました。

(5) 「その仲間を打ちたたき、(49) 」

彼は自分のことだけを考えて生きていますから、主人の帰りが遅いのをいいことにして、「その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始め」る始末です。

「その仲間を打ちたたき」は高ぶる様を、「酒飲みたちと飲んだり食べたり」は快楽に溺れる様を、表わしています。「主人はまだまだ帰るまい。」という心の中の思いが、主人は帰るまいという錯覚を招き、彼を欲望の虜にするのです。

(6) 「思いがけない日の思わぬ時間に (50) 」

ところが「そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。」

ここでは忠実な僕と悪い僕を分ける審判が確実に到来することが強調されています。しかもそれは、「あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らない (24:42) 」「人の子は、思いがけない時に来る (同44) 」とイエス様が言うておられるように、予期しない時にやってきます。

つまり思慮深い僕の忠実さは、主の再臨に対して目を覚ましていることでもあって、悪い僕の持っていないものなのです。

(7) 「彼をきびしく罰して、(51) 」

「そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはここで泣いて歯ざしりするのです。」

「きびしく罰して」(ディコトメオー)の原意は二つに切る(日本流に言えば八つ裂きにする)で、二つに切れるくらいひどい仕置きをするという意味になり、鞭打ち等の厳罰にも使われました。

二番目の刑罰の「その報いを偽善者たちと同じにする」は、一見「二つに切る」ほどには厳しく感じられませんが、イエス様が律法学者やパリサイ人たちを「偽善者」と呼んで、ゲヘナの刑罰を逃れられないと激しく非難された(23:33)ことを思うと、これは「二つに切る」以上に厳しい刑罰なのです。

2. 「忠実な僕と悪い僕の譬え」の中心点

イエス様は弟子たちに、前兆で終末が近いと知ることを「いちじくの木」で、油断しないで再臨を待ち望むことを「目を覚ましている僕」で、お教えになりました。そしてこの譬えは、神様から任されていることに、忠実に思慮深く励みながら再臨の時を待つことを教えるものです。「主人はまだまだ帰るまい。」という思いから生き方を誤る悪い僕の登場も、「忠実な思慮深い僕と違った生き方をしてはならない、と警告するためのものです。」

3. 「忠実な僕と悪い僕の譬え」と私たち

「その家のしもべたちを任されて、食事時には」彼らに食事をきちんと与える僕は弟子たち指導者を暗示していると、始めに書きましたが、読み終えた今改めて考えてみますと、この僕の立場は、御言葉を信じ、イエス様を信頼し、与えられた賜物の管理を任されている私たちにも当てはまります。

終末や再臨を忘れた時、私たちは生き方を間違えます。いつも再臨に備えて目を覚まし、与えられた賜物を用いて、任された務めに励む生活を送るように、この譬えは私たちに教えているのです。

十人の娘

- 1 そこで、天の御国は、たとえて言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。
- 2 そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。
- 3 愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。
- 4 賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。
- 5 花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうととして眠り始めた。
- 6 ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ。』と叫ぶ声がした。
- 7 娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。
- 8 ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』
- 9 しかし、賢い娘たちは答えて言った。『いいえ、あなたがたに分けてあげるにはとうてい足りません。それよりも店に行って、自分のをお買いなさい。』
- 10 そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。
- 11 そのあとで、ほかの娘たちも来て、『ご主人さま、ご主人さま。あけてください。』と言った。
- 12 しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなたがたを知りません。』と言った。
- 13 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。

マタイ25： 1 - 13

当時の婚礼の祝宴：

受難週の第三日。イエス様は弟子たちに、「忠実

^{しもべ}な僕と^{しもべ}悪い僕」で忠実に思慮深く働いて再臨を待つように教えられると、「十人の娘」で「思慮深い」準備について、補足してお教えになりました。

当時のユダヤの婚礼は、盛装した花婿が贈り物を持って、夕方、友人たちが打ち鳴らす楽器と共に、花嫁を迎えに花嫁の家に行くことから始まります。

正式な祝宴は花婿と花嫁が花婿の家に着いてから開かれるのが普通ですが、この譬えでは花婿が花嫁の家に着くとすぐ祝宴が始まっているので、二人が花婿の家へ着いてからの正式な祝宴の前に、花嫁の家でも一回目の祝宴が開かれたようです。

このとき花嫁の友人たちが、あかりを持って花婿を花嫁の家に迎える役目と、たいまつをかざして歌い踊りながら、二人を花婿の家へ送って行く役目を務めました。

たいまつはオリーブ油に浸した布切れを棒の先に巻き付けたものですが、15分ごとにオリーブ油を布に注ぎ足さなければならないので、眠り込んだり補給用の油を忘れてはしなかった筈です。それで譬えに出てくる「ともしび」は、銅か素焼きの器^{てしよく}を棒の先に固定して油に浸した布切れを詰める、手燭のようなランプと考えられます。

1. 十人の娘の譬え (25： 1 - 12)

(1) 「天の御国は、たとえて言えば、(1)」

「神の支配で起こることは、花婿を出迎える十人の娘で起こることと同じです。」という譬えです。

(2) 「五人は愚かで、五人は賢かった。(2)」

「五人は愚かで、五人は賢かった」と言っても、同じ数だけいたと言っているわけではありません。「愚か」「賢い」も、頭の善し悪しを言っているではありません。

「賢い」の原語は「^{しもべ}忠実な僕と^{しもべ}悪い僕」で学んだ「思慮深い」と同じで、任されている仕事が多かきものをよく理解した上での賢さ、思慮深さです。そういう意味で「賢い」娘と、そういう「賢さ」を持たない「愚かな」娘がいたということです。

(3)「油を用意しておかなかった。(3-4)」

「賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。」思慮深い娘たちは、花婿の到着が遅れても、ともしびをともに迎へに出られるよう、予備の油を準備していました。しかし「愚かな娘たち」は目先のことばかり考えていて、予備の油にまでは気が回らなかったのです。

(4)「そら、花婿だ。迎へに出よ。(5-7)」

「花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。」花婿が予想に反してなかなか来なかったのも、賢い娘も愚かな娘も眠ってしまいました。「ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎へに出よ。』と叫ぶ声があったのです。「娘たちは、みな起きて、自分のともしび」の芯を切ったり油を注ぎ足したりして、灯をかき立てました。

(5)「油を少し私たちに分けて(8-9)」

「愚かな娘たち」は、自分のランプの油がなくなりかけていたので、「賢い娘たち」に「油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。」と頼みます。しかし「あなたがたに分けてあげるにはとうてい足りません。それよりも店に行き、自分のをお買いなさい。」と断られます。

(6)「戸がしめられた。(10)」

そう言われて「愚かな娘たち」が、油を買いに出かけている間に、花婿が来てしまいました。「賢い娘たち」は「彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、」そして戸は「しめられた」のです。

(7)「私はあなたがたを知りません。(11-12)」

油を買って戻って来た「愚かな娘たち」は、戸が閉まっているので、「ご主人さま、ご主人さま。あけてください。」と頼みますが、「私はあなたがたを知りません。」と断られてしまいます。

目先のことだけ考えて予備の油を準備しなかった「愚かな娘たち」が締め出されたところで譬えは終わっています。これが譬えの中心点だからです。

主人のこの拒絶は、最後の審判が取り消し不可能な厳しいものであることを暗示しています。

2.「だから、目をさましていなさい。(13)」

イエス様は、この譬えの結論として「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。」と語っておられます。

譬えの中では「賢い娘たち」も「愚かな娘たち」も「みな、うとうとして眠り始めた」のですから、ここでイエス様が、「目をさましていなさい。」と言っておられるのは、肉体的に目を覚ましているということではありません。

イエス様が「目をさましていなさい。」と言っておられるのは、花婿の到着が遅れても、ともしびをともに迎へに出られるように予備の油を準備して待った、「賢い娘たち」の思慮深さのことです。

「その日、その時」がいつであっても、弟子たちは主人から任されている仕事が多様なものをよく理解した上での賢さ、思慮深さをもって、万全の備えをして待つことを求められているのです。

3.「十人の娘の譬え」と私たち

花婿の到着は、主の再臨を暗示していますから、花婿の到着が遅れても予備の油を買って待つということは、主の再臨の時まで、神様からの賜物である信仰を保ちながら生きることを指しています。

十字架のイエス様に目を注いで生きている私たちは、イエス様が備えて下さった信仰という油を感謝して受けるようにされています。

そのように変えられた私たちにイエス様は、この譬えで、主を迎えることに思いを集中して生きているか、そのことを人生の目標にしているか、と重ねて問うておられるのです。

主の再臨を待ち望みながらの信仰生活を、ペテロ4章ではこう教えています。「...祈りのために、心を整え身を慎みなさい。何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。...互いに親切にもてなし合いなさい。...賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。(7-10)」必ず来る主の再臨を待ち望みながら、このように生きることを求められているのです。

タラント

- 14 天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。
- 15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。
- 16 五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。
- 17 同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。
- 18 ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。
- 19 さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。
- 20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』
- 21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』
- 22 二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』
- 23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』
- 24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひ

どい方だとわかっていました。

- 25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』
- 26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。』
- 27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。
- 28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』
- 29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。
- 30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯ぎしりするのです。
- マタイ25 : 14 - 30
(ルカ19 : 11 - 27参照)

タラント：

忠実に思慮深く働いて再臨を待つキリスト者に求められる「思慮深い」面について「十人の娘」で教えられたイエス様は、今度は「忠実な」面について「タラント」でお教えになります。

通貨一タラントは、一タラントの重さ(約41kg)の銀の価格である六千デナリに相当します。一年に三百日働くとすると、二十年分の賃金に相当するわけです。

主人にとっては「わずかな物」かも知れませんが、五タラント預かった者は百年分、二タラントの者は四十年分、一タラントの者でも二十年分の賃金相当額という、彼らにとっては途方もなく多額の財産を預かったことになります。主人が彼らを信頼して任せられたことが分かります。

1. タラントの譬え (25 : 14 - 30)

(1) 「自分の財産を預け、旅に出て行く (14)」

「神の支配で起こることは、僕たちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人で起こることと同じです。」という譬えです。

なお邦訳聖書では訳出されていませんが、14節の原文は、「なぜなら」という接続詞で始まっています。このことは、この譬えが13節の「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。」を結論とする「十人の娘」を補足するために語られたことを示しています。

(2) 「おのおのその能力に応じて、(15)」

旅立つ主人は、僕たちを呼んで、「おのおのその能力に応じて、」五タラント、二タラント、一タラントを預けました。

英語の talent は、特殊な才能を表わしますが、タラントはそれとは違って、僕たちが、「おのおのその能力に応じて」主人から預けられた財産です。忠実なキリスト者は、自分の持っているものをみな（能力も経験も）、神様から豊かに預けられた賜物と受け止めて、「私には一タラントしか預けられていない。」などとは、言い訳しないのです。

(3) 「それで商売をして、さらに (16 - 18)」

五タラントと二タラントを預かった者は、「すぐに行って、それで商売をして、」それぞれ預かったのと同額をもうけました。「ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した」のです。

(4) 「良い忠実なしもべだ。(19 - 23)」

主人が帰って来て彼らと清算した時、商売をしてもうけた二人の僕は、主人から「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」と褒められます。

預けられた「わずかな物に忠実だった」僕は、天の御国で「たくさんの物を」任される者とされるのです（ルカ16：10、本書17章参照）。

(5) 「悪いなまけ者のしもべだ。(24 - 30)」

一タラント預かった僕は、主人に対する理解が他の僕とは違っていました。「あなたは ひどい方だ」と語ることで、自分に清算を求めること自体が不当だと主張しています。でも主人は、自分のことや自分の意図を理解しなかったその僕を怠け者と呼び、「だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。」と僕の不忠実な態度を責めます。

僕は預かったタラントを取り上げられ、「役に立たぬしもべ」として、「外の暗やみ」つまり永遠の滅びに追い出されてしまうのです。

一タラント預かった僕は、神様を間違えて理解し神様の意図を無視したパリサイ人や律法学者です。彼らは、律法を文字通り守ろうとし、守っていると自負していましたが、イエス様を排斥することで、律法の本質によって表わされる神様の意図を理解しなかったことが明らかにされたからです。彼らは、異邦人の光として預けられている役目についても、神様の意図を無視し続けていました。

2. 「タラントの譬え」と私たち

神様は、私たちが与えられた賜物を神様の意図に合わせて積極的に活用していくことを願っておられます。「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。（ペテロ 4：10）」が、この譬えの格好な説明となります。

もう一つ、この譬えが受難週の第三日に弟子たちに語られたことから、「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。（24：14）」という御国の福音の宣教を、私たちすべてに預けられたタラントと受け止めることも出来ます。私たちは、再臨に対する神様の意図を覚えて、御国の福音を伝える者として生きることを、求められているのです。

羊と山羊(最後の審判)

- 31 人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。
- 32 そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、
- 33 羊を自分の右に、山羊を左に置きます。
- 34 そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。』
- 35 あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、
- 36 わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』
- 37 すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。』
- 38 いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。』
- 39 また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』
- 40 すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたので

す。』

- 41 それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。』
- 42 おまえたちは、わたしが空腹であったとき、食べる物をくれず、渴いていたときにも飲ませず、
- 43 わたしが旅人であったときにも泊まらせず、裸であったときにも着る物をくれず、病気のときや牢にいたときにもたずねてくれなかった。』
- 44 そのとき、彼らも答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹であり、渴き、旅をし、裸であり、病気をし、牢におられるのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』
- 45 すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、おまえたちに告げます。おまえたちが、この最も小さい者たちのひとりにしなかったのは、わたしにしなかったのです。』
- 46 こうして、この人たちは永遠の刑罰にはいり、正しい人たちは永遠のいのちにはいるのです。』

マタイ25：31 - 46

羊と山羊：

羊は、毛が灰白色で、群れる習性があり、温和で弱くて愚かで、ユダヤ人から愛されていました。

ユダヤの山羊はギリシア山羊という種類で、普通の山羊より大きく、毛は黒くて長く、大きな耳が垂れ下がっています。また羊より賢く、訓練されて、「群れの先頭に立つやぎのようになれ。(エレミヤ50：8)」と言われるように、羊の群れの誘導用に使われました。

羊と山羊は一緒に放牧されますが、夕方になると寒さに弱い山羊は、新鮮な空気を好む羊からより分けられて、洞窟など暖かな場所に移されました。

義人を白に、悪人を黒に見立てて、白い羊と黒い山羊になぞらえることも行なわれていました。

1. 羊と山羊の譬え (31 - 46)

マタイの福音書に記されたイエス様の五大説教は24 - 25章の終末の預言で終わりますが、その最後がこの「羊と山羊」と呼ばれる最後の審判についての教えです。

(1) 「人の子はその栄光の位に着き (31 - 32 a) 」

その時イエス様は、王として「すべての御使いたちを伴って」来られます。既に「福音は全世界に宣べ伝えられて (24 : 14) 」いて、「すべての国々の民が、その御前に集められ」ます。最後の審判が始まるのです。

(2) 「羊を自分の右に、山羊を左に (32 b - 33) 」

羊と山羊は、この時まで入り交じっていますが、イエス様は「羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。」右は聖書では特別の意味を持っています。右手は力を象徴し (ヨブ記40 : 14)、祝福を与える手でもありました (黙示録 1 : 17)。また右側は、救い手が立つ側であり (詩篇16 : 8)、光栄の座でもありました (列王記 2 : 19)。

(3) 「備えられた御国を継ぎなさい。 (34) 」

イエス様は羊たちに、「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。」と言われます。

(4) 「主よ。いつ、私たちは、 (35 - 40) 」

そしてその理由として、「空腹であったとき 食べる物を与え、渴いていたとき 飲ませ、旅人であったとき 宿を貸し、裸のとき 着る物を与え、病気をしたとき 見舞い、牢にいたとき

たずねてくれた (35 - 36) 」と、六つの愛の業^{わざ}を示されます。六つともすべて助けを必要としている状態です。いつそのようなことをしたか、と彼らが驚いて問い返すと、イエス様は、「わたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。」とお答えになります。助けを必要としている人々を助けたのは「わたしにしたのです。」と言っておられるのです。

(5) 「のろわれた者ども。 (41 - 46) 」

次にイエス様は、山羊たちに「悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。」と宣告され、その理由として、羊たちがしてくれたような愛の業をしてくれなかった、と言われます。

彼らは、イエス様の挙げられた一つ一つの愛の業が、さほど大事なことは思わなかったのかも知れませんが。「いつ、お世話しなかったのでしょうか。」と、羊たちより簡単な言葉で問い返します。

その問い返しにイエス様は「この最も小さい者たちのひとりにしなかったのは、わたしにしなかったのです。」とお答えになります。そして譬えをこう締め括っておられます。「こうして、この人たちは永遠の刑罰にはいり、正しい人たちは永遠のいのちにはいるのです。」

2. この譬えの中心点

イエス様はこの譬えで、最後の審判は「すべての国々の民が、その御前に集められ」て始まり、審判を免れる者は一人もいないことを、宣言されます。

そして、イエス様に愛の業をしたかどうか、審判の結果である「永遠のいのち」と「永遠の刑罰」に分けられる基準として何度も繰り返されているので、これがこの譬えの中心点であると言えます。

イエス様を信じる信仰は私たちの救いを保証するものですが、その信仰から出た愛の業は、救いを確信に至らせるものなのです。

3. 「羊と山羊の譬え」と私たち

「いのち」に分けられた羊たちは、自分たちの愛の業を覚えていませんでした。それは彼らが「役に立たない僕^{しもべ}」の「なすべきことをしただけです。」という気持で、愛の業に生きていたからです。

愛の業はイエス様から受けた恵みを覚えて生きて行くときに実践できるもので、私たちをそのように変えて下さったのも、それを受けて下さるのも、ご自身である、とイエス様は教えておられるのです。

地の塩、世の光

13 あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。マタイ 5：13

(マルコ 9：50、ルカ14：34 - 35参照)

14 あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。

15 また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。

16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。 同14 - 16

(マルコ 4：21、ルカ 8：16, 11：33、

ヨハネ 8：12参照)

「八つの幸い」と「地の塩、世の光」：

マタイの福音書には、イエス様のなされた五つの大きな説教が記されていますが、その最初の説教が5～7章の「山上の説教」です。

「山上の説教」は、7：28に「イエスがこれらのことばを語り終わられると、群衆はその教えに驚いた。」とあるように、群衆のただ中で話してはおられますが、直接的には「弟子たち」に向けての説教です(5：1-2)。それもその時従っていた数名の弟子たちだけにではなく、私たちも含まれるすべてのキリスト者に向けて話されたと受け止めるべきものなのです。

そのうち5：3-10の「八つの幸い」の原文は、どれも「幸いです」で始まる感嘆文で、キリスト者の特性が示され、11-12は散文体で、キリスト者に対する迫害と、迫害の故に喜ぶべきことが示され、13-16は「地の塩、世の光」の譬えで、キリスト者のこの世での役割が示されています。

1. 八つの幸い：キリスト者の特性 (3-10)

八つの幸いと言っても、八つの別の特性ではありません。神様の御前にある人の持つ幸いな特性が、八つの角度から描かれているのです。これは生まれつきの気質ではなく、キリスト者はすべてこの特性を表わすように召されていて、やがて完全に表わせるようになる、とされているのです。

(1) 「心の貧しい者 (3)」

ここに使われている「心」は「霊」、「貧しい」は極貧の状態を表わす言葉なので、「心の貧しい」は、「自らの霊性で、自分が神様の御前で無一物・乞食同然であることを知っている、だからただ神様に拠り頼んで生きて行く」という意味になります。そういう人は、神様の支配のうちにあるのです。

(2) 「悲しむ者 (4)」

「悲しむ」の原語は、例えば死んだ人を悼むように、他の人の苦しみの故に悲しむという意味を含みます。「心の貧しい者」は、自らの「心の貧しい」ことを「悲しむ」だけで止まらないで、一歩進んで他の人の苦しみを共に担って「悲しむ」のです。そのような人は、神様に慰めて頂けるのです。

(3) 「柔和な者 (5)」

「柔和な」は、「心の貧しい」とほとんど同義語で、自分の存在が神様に拠るしかないことを知ってへりくだる、敬虔な姿勢を表わします。そのような人は、どんなに苦しい時にもひたすら御心に従って歩み、やがて御国を相続する者とされるのです。

(4) 「義に飢え渴いている者 (6)」

「義に飢え渴いている」は、自己中心的な生き方を捨て、罪の欲望から解放され、御心にかなう生活を実現できるように渴望するという意味です。そういう人は、望んでいるものを与えられるのです。

(5) 「あわれみ深い者 (7)」

聖書の「あわれみ」は、上から同情するとか気の毒に思うということではなく、「一緒に経験する、共に苦しむ」ということです。自分が神様の憐れみによって生かされていることを知る者は、神様から

の憐れみを分かち合う者となり、人の苦しみを共に担う者、限りなく赦す者、となります。そういう人には、さらに神様の憐れみが加えられるのです。

(6)「心のきよい者(8)」

この「心」は、人間の精神活動の主体、人格の中心で、「きよい」は汚けがされていない、二心ふたごころがないということです。「心のきよい者」は、自分の心の汚けがれを悲しんで、すべての行動の源において「きよい者」であろうとし、ひたすら神様に求めます。そのような人は、神様との交わりに入れられ、やがて御顔を仰ぎ見ることが出来るのです。

(7)「平和をつくる者(9)」

「平和をつくる者」の原語は、新約聖書ではここにしかない(動詞形がコロサイ 1:20にあります)言葉で、平穩無事を求めて譲歩する者や単なる平和愛好者ではなく、神様から与えられる平和を積極的に人と分かち合える者を意味します。そのような人を神様は、ご自身の子として認めて下さるのです。

(8)「義のために迫害されている者(10)」

「義」とは、神様がお求めになる正しさにかなう生き方のことです。これは世の生き方とは異なるので、イエス様にならって生きようとする者は、その生き方の故に、世から迫害を受けます。「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。(ヨハネ15:20)」

2. 世の迫害とキリスト者の喜び(11-12)

三人称で話しておられたのが、ここからは二人称で、弟子たちへの直接の語りかけに変わります。

弟子たちがイエス様にならい、御心にかなう生き方をしているが故に、世は弟子たちを迫害します。でも「わたしのために」迫害されているのなら、それは天国に行くように定められていることの証明ではないか。だからその迫害の故に「喜びなさい」。イエス様は、そう言っておられるのです。

3. キリスト者のこの世での役割(13-16)

八つの幸いを与えられている者には、その幸いを世に示す役割がある、とイエス様は言われます。

(1)地の塩の譬え(13)

「地」は「世」とほとんど同義語です。「塩」には、腐敗を防ぐ役割と味をつける役割があります。キリスト者には、世の腐敗を示し、墮落を防ぐ役割があり、また調味料として世に混じって、神様の義と愛を証する役割もあるのです。「塩けをなくしたら」の原意は「馬鹿になったら」です。当時は、吸湿したり土と混ざったりして役立たずになった塩は、人の行き来する道に捨てました。キリスト者が世と妥協したり、迫害にたじろいだりしたら、役立たずの塩と同じだ、と言っておられるのです。

(2)世の光の譬え(14-16)

「柎」は一斗缶の半分弱の大きさです。^{ひとま}一間しかない家に灯りは一つで、壁に付けた石の燭台に載せました。消す時は、灯りに「柎」をかぶせました。「あかりをつけて、それを柎の下に置く者はありません。」は「明るくするために灯りをつけたのに、すぐ消す者はいない。」ということなのです。

「あなたがたの光を人々の前で輝かせ」の「輝かせ」は三人称単数への命令形で、「あなたがた」が輝けというわけではありません。イエス様の光をうちにともされた弟子たちは、その生き方を通して「ともされた光に輝いて頂け」と言われているのです。

4. 二つの譬えと私たち

腐敗・墮落している世にあって私たちは、腐敗を防ぐ「地の塩」としての特性を与えられています。世と違っているために迫害されもしますが、その世に私たちは、塩として置かれているのです。

「わたしは、世の光です。(ヨハネ 8:12)」とイエス様は言われました。世の人々は、イエス様からの光をうちにともされている私たちを通して、イエス様を見ることとなります。こうして私たちは、神様の栄光を世に表わす役割を負っているのです。

6: 1-18で、パリサイ人の偽善行為を責めながらキリスト者の執るべき態度を示されたイエス様が、「自分の宝は、天にたくわえなさい。」と命じておられるのです。

19: 21では「永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」と尋ねた青年にイエス様は、「あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。」と諭されました。

でもこの警えの中心点は、宝をたくわえる場所が天か地かということであって、宝が何であるかは、次章の「空の鳥と野のゆり」まで明かされません。

(3)「宝のあるところに、あなたの心も(21)」

ここの「心」は、「心のきよい者(5: 8)」の「心」と同じで人間の精神活動の主体、人格の中心を言います。イエス様は「あなたの宝のあるところに、あなたの心もある」つまり「宝」をたくわえた場所に「心」も束縛される、と言っておられます。でも実は、「心」のあるところに「宝」をたくわえる私たちに、「あなたの心はどこにあるのか。そこにあなたは宝をたくわえる。」と警告しておられるのであって、善行を施して天の口座に貯金しなさいと言っておられるのではないのです。

2. 目の警え(22-23): 健全な目と悪い目

「からだ」は人格としてのその人全体を表わしています。「目」は神様からの光を取り入れる所で、「健全な」の原意は「一つのものに集中している」ですから、健全な目は神様をしっかりと見詰める目、真っ直ぐに神様に向いている視線です。

このような目は、自分の罪に気付かされ、イエス様の十字架の血だけが自分の罪をきよめる、という事実を知って初めて持てる目ですから、「健全な」目の持ち主は、天に宝をたくわえることに、一心に励むのです。こうしてキリスト者は、この世に心を奪われることなく、その生き方を通して、「うちにともされている光に輝いて」頂くのです。

一方悪い目は、曇ったり二重に見えたりして神様からの光を取り入れられない目ということになり、地上の宝、お金や名誉や地位に心を奪われながら、たまたに神様の方も見るというような目を言います。悪い目は神様の方を直視していないので、ますます地上の「宝」に心を奪われて、「暗さ」の中を歩み続けることになってしまいます。

3. 二人の主人の警え(24): 神と富

「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。」「仕える」には「奴隷として仕える」という意味の言葉が使われています。二人の主人に奴隷として仕えることが、「してはならない」のではなく「できません」と断言されているのです。

一方の「富」は、擬人化されてマモンと呼ばれています。マモンは神様に対抗して「主人」となることを狙って人の心を支配します。人が二人の主人に仕えようとしても、利用するはずの富に逆に仕えることになって、神様を軽んじて、神様に心を献げられなくなります。地上の宝を求めるのに精一杯で、祈りも口先だけになってしまいます。

神様に抛り頼んで生きるか、富に支配されたまま生きるか、中間の道はないのです。

4. 三つの警えと私たち

「神様をしっかりと見詰める目」といっても、純粋で立派な信仰を強要されている訳ではありません。本当に、父なる神様に抛り頼んで生きているのか、それとも地上の宝だけでは不安が残るので、補強のために神様にも頼むというのか、この三つの警えは私たちキリスト者に、その点を問うているのです。

神様との交わりの中に生きるキリスト者は、次の御言葉を思い浮かべながら、この世とかがかわることが出来るのです。「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。(コリント 4: 18)」

空の鳥と野のゆり

- 25 だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。
- 26 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。
- 27 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。
- 28 なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまなさい。働きもせず、紡ぎもしません。
- 29 しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。
- 30 きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。
- 31 そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。
- 32 こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。
- 33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらの

ものはすべて与えられます。

- 34 だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。 マタイ 6:25 - 34

(ルカ12:22 - 34参照)

心配 (6:25, (25), 27, 28, 31, 34, 34) :

「心配」という言葉が7回(原文では6回)も使われているので、「心配」に振り回されないように戒めておられることが分かります。

ここで「心配」というのは、生活のための計画や配慮をすることではありません。一つのものに集中する「健全な目」を持たないために、地上の「宝」に心を奪われて、心が神様からそれてしまうことを言っています。つまり「健全な目」を持って、富にではなく神様に仕えなければならない、ということが、別の言い方で言われているのです。

1. 空の鳥と野のゆりの譬え

(1) 「心配したりしてはいけません。(25)」

25節冒頭の「だから」は24節の「あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということではできません。」を受けての「だから」です。神と富とは仕えられず、富に仕えることが「心配」の種になるだけなら、富に仕えることはやめるべきなのです。

神様は「いのち(プシュケー：人間の存在全体を意味します)」や「からだ」を与えて下さっているのですから、それらを保つための食べ物や着物も備えて下さる筈です。衣食についての不安は全く無用の「心配」なのです。

(2) 「空の鳥を見なさい。(26)」

まず「いのち」について考えます。「見なさい」は、「じっくりと見て考えなさい」です。鳥たちは「心配」をしないのに、「天の父」は必要を備えて「養ってくださ」います。まして神様の子どもである私たちです。神様は必ず「養ってくださる」筈です。「心配」せずに、信頼することです。

(3)「いのちをすこしでも延ばすことが(27)」

私たちがいくら「心配」しても、神様の御手の中にある「いのち(ヘーリキア：寿命)を少しでも延ばすこと」など出来ません。それなら、それより小さなことはすべて、「心配」しないで御手にお委ねしよう、とイエス様は言われます。

(4)「なぜ着物のことで心配する(28-30)」

次は「からだ」の、着物についての「心配」で、枯れたらたきつけにされる野の草花でさえ、ソロモンの栄華に勝る装いが与えられている。野の草花でさえこのように装って下さる神様が、あなたがたにそれ以上よくして下さらない筈がない。信仰が足りないから「心配」することになるのだ。イエス様は今度は、強い口調でお話しになっておられます。

(5)「そういうわけだから、(31-32)」

25-30節でお話しになった、「いのち」のために「食べる」「飲む」、「からだ」のために「着る」ことについて、イエス様は、もうこれからはそんな「心配」を一切やめなさい、と総括されます。

それに続く「なぜなら(訳出されていません)」で始まる説明文でイエス様は、このような「心配」は、天の父を知らずに、必要なものは自分で備えなければならぬと考えて、「心配」しながら生きている異邦人のすることだ、と言われます。

「しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。」

「心配」に振り回されているキリスト者がいたら、それは、すべての必要を知っておられる天の父を、異邦人(=異教徒)と同様、信じていないからだ、と言われるのです。キリスト者は、神様が「必要であることを知って」、愛をもって備えて下さることに信頼して生活するのです。

(6)「だから、神の国とその義とを(33)」

ここで、20節から懸案であった天にたくわえる宝が何であるかが示されます。「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」

「神の国とその義とを求める」ということは、私たちに「必要なものを知っておられ」備えて下さる天の父なる神様を信頼しきって、支配して頂くことです。「心配」から抜けきれないこの私を支配し、聖め、支えて頂くことです。イエス様がそのために来られ、死なれ、復活されたことを信じて、「神の国と神の義」が不可欠のものに変わる時、私たちは「健全な目」で神様をしっかりと見詰める者となり、「心配」から解放され、与えられる富を、神様と人のために自由に使える者とされます。そして「天の父」が備えて下さるものに気づき、それを宝として受け入れるようにされるのです。

(7)「だから、あすのための心配は無用(34)」

「だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」

讚美歌288番2節、「ゆくすえとおく見るをねがわじ、主よ、わがよわき足をまもりて、ひとあし、またひとあし、みちをばしめしたまえ。」の原詞、John Henry Newman の“ I do not ask to see the distant scene, one step enough for me. (一歩目だけ、足元を照らして下さい。あとは、見えなくても、信じて歩き出します。)”がよくこの信仰を表わしています。「天の父」が支配しておられる世界に、悪いことなど起こる筈がないからです。

2. 「空の鳥と野のゆりの譬え」と私たち

「信仰の薄い人たち(オリゴピストイ)」は30節のほか、8:26、14:31、16:8にも出て来ます。信じると言いながら実はあまり信頼しておらず、すべての必要を知っておられる天の父を信じている筈なのに、いざ困難に出会うと信仰が働かなくなる、そういう人を指して、イエス様が使われました。

空の鳥や野の草花を「養っていただく」神様は、イエス様を通して、私たちの「天の父」です。このことを心の底から信じたその時に、「心配」は全く起こらなくなる筈なのです。

こう言われます。「まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。」

問題は、私たちが優越感を押し隠し、内心憤慨しながら「あなたの目のちりを取らせてください。」と親切を装って申し出ることです。そうなる前に私たちは、主の憐れみによって赦された身であることを思い起こして、真に「あわれみ深い者（人の苦しみを共に担い、限りなく赦す者）」として、兄弟に申し出なければならないのです。

(4)「聖なるものを犬に与えては (6)」

「聖なるもの」「真珠」は信仰の奥義や福音の真理を、「犬」「豚」は福音に敵対する者を、指していると考えられます。みだりに人を審くなという戒めに極端に反応して、批判を全く放棄してしまわないように、6節では、敵対者に対しては福音を押し付けしないで、毅然とした態度を執ることが、求められているのです（使徒13：45 - 51、18：6参照）。

2. ちりと梁の譬えと私たち

みだりに人を審くな、しかし敵対者は識別しろ。これは相当の難題です。たじろぐ私たちにイエス様は、「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。(7)」と言われます。

原文では「求め続けなさい」「捜し続けなさい」「たたき続けなさい」となっています。

この譬えだけでなく、ここまで与えられた教えは難題ばかりでした。しかしそれは自力で答えを見付けようとするからで、イエス様はここで、答えは祈り求めるものだから、あきらめないで、根気よく祈り続けなさい、と教えておられるのです。

3. 二つの門の譬え (13 - 14)

5章 1節 - 7章11節で御国の民としての生き方をお教えになり、12節で「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。

これが律法であり預言者です。」と締めくくられたイエス様は、13節から、そのような生き方が出来るようになる条件を、真偽、二つの生き方を対比させながら、三つの譬えで示されます。その一つ目が、今回学ぶ二つの門の譬えです。

(1)「狭い門からはいりなさい。(13a)」

イエス様は、私たちを導こうとされている生き方の特徴は「狭い門 - 細い道」だとして、はっきりした決断をもって入れという強い命令の形で、「狭い門からはいりなさい。」と、言っておられます。

(2)「滅びに至る門は大きく、(13b)」

世の人は、財産や地位や名誉など、この世の宝を求める「大きい門 - 広い道」を好みます。多くの人々が好む道ですが、結末は、死ぬだけでなく、生きていたことのすべてが無意味に終わる「滅び」です。

(3)「いのちに至る門は小さく、(14)」

原文は「いのちに導く門は何と狭く、道は何と細いことか。」という感嘆文です。父なる神は待っておられるのに、多くの人々がそういう生き方を避けてしまう、と嘆いておられるのです。

その生き方は、「八つの幸い」で教えられたように、自分の心の汚れを^{けが}悲しみ、神様に抛り頼んで、御心にかなう生活を実現できるように渴望し、人の苦しみを共に担い、イエス様にならう生き方の故に世から迫害を受ける、狭くて細い道です。そのような道を捜し求める人が少ないので、「それを見いだす者はまれ」ということになるのです。

4. 二つの門の譬えと私たち

二つの門と二つの道を示されたイエス様は、そのどちらを選ぶかを私たちに求めておられます。

「わたしは門です。だれでも、わたしを通過しているなら、救われます。(ヨハネ10：9a)」と言われたイエス様の門だけが「いのちに至る門」です。その門は「心の貧しい（自分が神様の御前で無一物・乞食同然であることを認め、ただ神様に抛り頼んで生きて行く）者」にだけ開かれているのです。

二つの実、二つの土台

- 15 にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。
- 16 あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。
- 17 同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。
- 18 良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。
- 19 良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。
- 20 こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。
- マタイ 7:15 - 20 (ルカ 6:43 - 44参照)
- 24 だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。
- 25 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。
- 26 また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なわない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。
- 27 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」 同24 - 27 (ルカ 6:47 - 49参照)

譬えによる山上の説教の結び (7:13 - 27) :

山上の説教を「黄金律 (12)」と締めくくられたイエス様は、御国の民として生きるためには、狭い門から入って、狭い道を行かなければならないと、

「二つの門 (13 - 14)」で強調されました。

しかしその狭い門の外側で、言葉巧みに広い門へと誘う者がいるとイエス様は警告されます。それが「二つの木 (15 - 20)」で、羊のなりをしてやって来る偽預言者たちを、その実によって識別するように、譬えでお教えになったのです。

次いで21 - 23節で、天の御国に本当に入るのは、偽預言者や口先だけのキリスト者では、全くない。「天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」と、強い口調で警告されました。

その上で、山上の説教の最後の譬え「二つの土台 (24 - 27)」で、イエス様の教えに従い、イエス様に拠り頼んで生きることをお求めになったのです。今回は説教の結びの、この二つの譬えを学びます。

1. 二つの木の譬え (7:15 - 20)

(1) 「にせ預言者たちに気をつけなさい。(15)」
「にせ預言者」は、パウロやペテロも「狼 (使徒 20:29)」とか「にせ教師 (ペテロ 2:1)」と呼んで警告しています。

その「にせ預言者」が「羊のなりをしてやって来る」と、イエス様は言われます。善良なキリスト者を装って来るというのです。エレミヤも「預言者は偽りの預言をし、祭司は自分かつてに治め、わたしの民はそれを愛している。(5:31)」「彼らは、わたしの民の傷を手軽にいやし、平安がないのに、『平安だ、平安だ。』と言っている。(6:14)」と言っています。例えば洗礼を受けさえすればそれでいいのだと言って、罪の深さには目をつぶって、実は滅びに導くというのです。

(2) 「実によって彼らを見分ける (16 - 20)」

そのような恐ろしい偽預言者を見分ける秘訣は、「実によって彼らを見分ける」ことで、「あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。」とイエス様は言われます。目の譬えの「健全目」の持ち主なら、それが出来るというのです。

2. 二つの木の譬えと私たち

イスラエルの共同体を混乱の坩堝 (melting pot) にした偽預言者たちの悪影響を知っておられたイエス様は、神の民とその共同体の中にも偽預言者の悪影響があることを教えられます。しかし、「実によって彼らを見分ける」ことと、「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれる」と教えられたことで、良い実を結ばない人は必ず審かれることと、私たちが良い実を結ぶ者であるようにとします。

3. 二つの土台の譬え (24 - 27)

「二つの木」の譬えは、「良い実を結ぶ」という言葉で「良い行ない」を強調しましたが、「二つの土台」の譬えは、「岩の上に自分の家を建てる」という言葉で「聞いて行なうこと」を強調しています。

(1) 「これらのことばを聞いてそれを行なう(24)」

イエス様の言葉を「聞くこと」と「行なうこと」とで分けることはいけません。ヤコブも、「聞くこと」と「行なうこと」とは分けられないもので、みことばを聞いても実行しない人は、「自分を欺いている」、「死んだ人」だと教えます(ヤコブ1:22、2:17)。

(2) 「岩の上に自分の家を建てる賢い人(24)」

「岩」は、イエス様をことを意味します。つまり、イエス様が岩であります。イエス様を使徒ペテロは、「なぜなら、聖書にこうあるからです。見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。したがって、より頼んでいるあなたがたには尊いものです」(第1ペテロ1:6-7)と語っています。

「賢い人」とは、思いが深い、あるいは、見るべきものをちゃんと見ている人、という意味が含まれています。つまり、イエス様を岩として信じ、イエス様の教えを「聞いて行なう」、イエス様に拠り頼んで生きることを求める人のことです。

「比べることができます。」という言葉は、未来形の動詞で表現されていて、将来、賢い人に比べられる時が来るであろうと、という意味であります。つまり、今ここではイエス様の言葉を聞いて行なうか、あるいは聞いても行なわないか、この二つの生き方の違うかはまだ明らかではないが、必ず明らかになる時が来るということです。

(4) 「雨と洪水、激しい風(25)」

「雨や洪水や激しい風」は、起こりかねない人生の苦難、試練を意味すると読んでもよいかもしれませんが、世の終わりのこととして、すべてのものが終わりを迎え、人間のすべてのわざが神様によって審かれる意味として読むことができます。

山上の説教が、その終わりに至ってこのような終末を語るのは、私たちに恐れさせるためではなく、イエス様を信じて、イエス様の言葉を「聞いて行なう者」にある望みを告げるためです。

(5) 「砂の上に自分の家を建てた愚かな人(26)」

「砂の上に建てる愚かな人」とは、神の知恵として来られたイエス様(第1コリント1:24)ではなく、この世のものや自分の知恵によって生きようとする人のことです。

4. 二つの土台の譬えと私たち

山上の説教の最後の譬え話「二つの土台」は、イエス様の言葉を「聞いて」「行なう」ことの重要性を教えます。これは単なるイエス様の言葉に聞き従うことだけを教えるものではありません。寧ろ、イエス様の言葉を聞いて行なうことは、イエス様を岩として信じて行なうことだと教えることで、イエス様に対する信仰と行ないとの一致を教えているのです。

「この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである。時が近づいているからである。」(ヨハネの黙示録1:3)